

聖徒の道

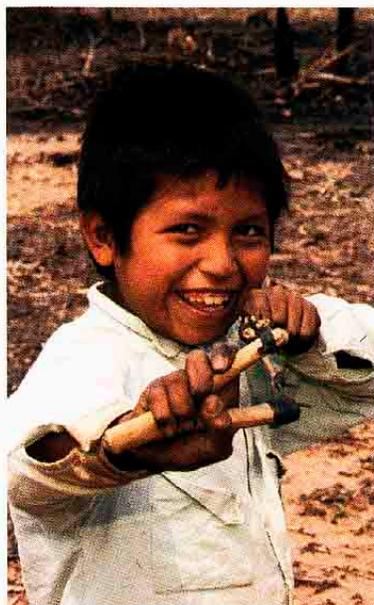
9
1993



末日聖徒
イエス・キリスト
教会

聖徒の道

1993年9月号



表紙——カメラの前でおどけるこの男の子は、南アメリカのパラグアイにあるニヴァクレボケロンに住んでいる。彼もこの国の多くの末日聖徒の開拓者のひとり。
裏表紙——(上)パラグアイの田園風景のひとつ。 (中央)アスンシオンに住むウムベルト・カネーテ兄弟と奥さんのピクトリア・カネーテ姉妹。3人の息子、ウムベルト(4歳)、ダビッド(3歳)、フェルナンド(1歳)とともに。(下)アスンシオンにあるワード部のタレントショーで踊りを披露する独身成人たち。(本誌「パラグアイの開拓者たち」pp.10-21参照。写真撮影マービン・K・ガードナー)

こどものページ表紙——「子牛」 エドウィン・エバンズ(1860-1946年)画
1890年代の初め、教会のえん助をえて、4人の末日せい徒の画家がフランスのパリにりゅう学しました。エバンズ兄弟はその中の1人。4人は、上達したぎじゅつを用いて、ソルトレーク神でんのかべに絵をかき、1893年4月には神でんがけん堂されました。

一般

大管長会メッセージ——昇栄への招き

第二副管長トーマス・S・モンソン 2

信仰に頼って グスタフォ・アドルフォ・アバロス 8

パラグアイの開拓者たち マービン・K・ガードナー 10

ジョージ・アルバート・スミス——生ける愛の模範

アーサー・R・バセット 26

世界の子供たちの芸術 34

南アメリカ南部地域で活躍する末日聖徒 44

青少年

なぜ自分は走っているのだろうか アンヘル・アブレア長老 22

モルモンメッセージ——逆境はあなたを強くする 33

導きを受けて入り込んだ道 40

若人の広場 46

定期特別記事

読者からの便り 1

家庭訪問メッセージ——地球の資源を大切に使う 25

こども

ジョセフ・フィールディング・スミス

ケリー・リックス・アダムズ 2

シャノンの思いがけないおくり物 マージョリー・A・パーカー 4

分かち合いの時間——われらは、正じきなるべきことをしんず

ジュディ・エドワーズ 6

良いサマリヤ人になったエリン パメラ・ブレイトン 8

おもちゃばこ 12

少年のあかし シャルロット・グロスニカル・ドメニコ 13

神に近づきなさい ヘンリー・B・アイリング長老 16

聖徒の道

1993年9月号

本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊——イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊——インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊——アイスランド語。

大管長会：エズラ・タフト・ベンソン、ゴードン・B・ヒンクレイ、トーマス・S・モンソン
十二使徒定員会：ハワード・W・ハンター、ボイド・K・バッカー、マービン・J・アシュトン、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オックス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット

顧問：レックス・D・ピネガー、ジョン・H・グロバーク、V・ダラス・メリル、ロバート・E・ウエルズ

編集長：レックス・D・ピネガー
教科課程管理部実務部長：ロナルド・L・ナイトン
教会機関誌ディレクター：トーマス・L・ピーターソン

国際機関誌

編集主幹：ブライアン・K・ケリー
編集主幹補佐：マービン・K・ガードナー
編集副主幹：デビッド・ミッチェル
編集補佐/こどものページ：ディエーン・ウオーカー

工程管理：トム・フォセット
チーフアートディレクター：M・マサト・カワサキ
アートディレクター：スコット・D・バン・カンペン
デザイナー：シェリー・クック
制作：レジナルド・J・クリステンセン、ステイブ・テイhton、ジェーン・アン・ケンズ、デニス・カービー

配送部長：ジョイス・ハンセン
聖徒の道 1993年9月号第37巻第9号
発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会

〒106 東京都港区南麻布5-10-30
電話 03-3440-2351
印刷所 株式会社 精興社/クロスロード
定価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)
半年予約1,100円(送料共)
普通号150円、大会号350円

Copyright © 1993 by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved. Printed in Japan. 英語版承認—1991年10月 翻訳承認—1991年10月 原題—International Magazine September 1993. Japanese. 93989300.
●定期購読は、「聖徒の道」予約申し込み用紙、でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/東京0-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106東京都港区南麻布5-10-30管理本部経理課 ☎03-3440-2351(代表) ●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ…〒213川崎市高津区溝の口131/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター ☎044-811-0417

The Seito No Michi (ISSN 0385-7670) is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150. Second-class postage paid at Salt Lake City, UT 84150. Subscription price \$14.00 a year. \$1.50 per single copy. Thirty days' notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A. Subscription information telephone number 801-240-2947.

POSTMASTER: Send address changes to Seito No Michi at 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A.

読者からの便り

心の琴線に触れる読み物

教会員になってから9年になります。今までずっと「リアホナ」(スペイン語版)を愛読してきました。「リアホナ」を読むたびにすばらしい世界をかいま見ることができます。また、自分には世界じゅうの教会に特別な兄弟と姉妹がいるのだということを思い起こさせてくれます。

私は19歳で、特に若い人たちに向けた記事を読むのが好きです。

「リアホナ」は私の生活に良い影響を及ぼしています。いつも心の琴線に触れるようなメッセージが載っていて、主の教えに従った生活ができるよう助けてくれます。

すばらしい読み物をありがとうございます。

ホンジュラス、ラ・エントラダ地方部
サンタ・バルバラ支部
サンドラ・ユーディット・パス・オレヤーナ

学ぶための羅針盤

私は、グアテマラのサン・マルコス県サン・ペドロ・サカテペクスにあるインデペンデンシアワード部の会員です。私の家族はこの地域での初期の改宗者で、教会に入ってから30年になります。

世界じゅうどこにいてもそうですが、教会幹部は私たちに、集会に出席すること、聖典を学ぶこと、神殿に参入すること、そして「リアホナ」(スペイン語版)を購読することによって、私たちが交わした神聖な誓約を心に留め、守るように勧告しています。

私自身、著述業に携わっていますが、「リアホナ」に掲載される勧告やすばらしい記事を読むのをいつも楽しみにしています。また総大会で語られる教会幹部の靈感あふれる言葉にも喜びを

感じます。皆さんもご存じのように、この世で得たすべての知識は来世まで持つていくことができるのです。学ぶためのすばらしい羅針盤である「リアホナ」に感謝しています。

グアテマラ、サン・マルコス
エメリナ・ヴィクトリア・バリ奥斯・デ・デレオン

偉大な奇跡

31年間の教会員生活の中で、たくさんのすばらしい出来事を目にしてきました。とりわけ、イエス・キリストの福音を受け入れた人々が、生活を改善し、変わっていくという偉大な奇跡を目にするときほど私にとってうれしいことはありません。

主が皆さんを祝福され、教会の機関誌がこれからも発行され続けるように願っています。この機関誌を読むたびに、とても幸せな気持ちになれるからです。

チリ、キルプエステーキ部
キルプエ中央ワード部
イルマ・デ・マケーナ

編集室から

愛読者の皆さんにとっても感謝しています。皆さんの手紙、記事、物語などをお寄せください。どの国の言葉でもけっこうです。(投稿の際は、住所、氏名、ステーキ部/伝道部/地方部、ワード部/支部名を明記してください)あて先は下記のとおりです。

International Magazines
50 East North Temple Street
Salt Lake City, Utah 84150
U.S.A.



昇栄への招き

第二副管長
トーマス・S・モンソン

どこを見ても急ぐ人々ばかりです。ジェット機は大切な乗客を乗せ、広大な大陸や大海原の上を所狭しと飛んでいます。人との約束を守るために、あるいは観光業者の呼び物に引き付けられて人々は空を飛び回り、友人や家族は、それぞれに特定の便を待ち受けています。車線がいくつもある近代的な高速道路では、何百万台という車が、それをさらに上回る数の人々を乗せて、ひっきりなしに走り続けています。

人間の作り出す、この脈動する流れが止まることなどあるのでしょうか。この混乱した生活のペースが、^{めいそう}瞑想の時間として、すなわち、永遠の真理に思いをはせる時間として、一瞬たりとも止まることはあるのでしょうか。

永遠の真理に比べ、日常生活の問題や悩みは実にささいなものです。夕食は何にしようか、今夜はいい映画をやっているだろうか、テレビの番組はどうだろうか、土曜日はどこへ出かけようかといったこまごまとした悩みは、たとえば自分の愛する者が傷を負った、健康を害して苦しんでいる、あるい



主は文字どおり、世の救い主、神の御子、王の王、イスラエルの聖者、よみがえりの主であられることを証^{あかし}します。

PHOTOGRAPHY BY JED CLARK;
ABOVE, DETAIL FROM CHRIST AND THE RICH YOUNG RULER,
BY HEINRICH HOFMANN

は人生を半ばで終わろうとしているといった緊迫した状態にあるときには、実取るに足りなかつまらないものに見えてきます。こうした状況にあつては、真理と日常生活のこまごまとした事柄はやがて切り離されるものです。そして人々の心は、人はどこから来て、なぜここにいるのか、この世を去った後にどこへ行くのかといった、人生最大の疑問に対する神聖な答えを求めて、神の方向へ向くのです。これらの疑問に対する答えは、大学の教科書を開いても、情報サービスセンターに電話を入れてもわかるものではありません。硬貨を投げたり、いくつかの選択肢の中から適当に選んだりして見つけるものでもありません。これらは、この世を超越した永遠にかかわる問題なのです。

人はどこから来たのか。これは、赤ちゃんが産声を上げた時、すべての両親や祖父母が口には出さないまでも思いをはせる質問です。完璧なまでに整った幼な子の姿に、目を見張らない人はいません。外には見えない循環器系、消化器系、神経系のすばらしい働きは言うまでもなく、小さなつま先や繊細な指、かわいらしい頭、これらはどれもみな、聖なる創造主^{あかし}を証するものです。

使徒パウロは、マルスの丘のアテネ人に、私たちは「神の子孫なのである」(使徒17:29)と言いました。自分の肉体をこの世の両親から受け継いでいることを知っている私たちは、このパウロの言葉の意味を、もっと真剣に考える必要があるのではないのでしょうか。主はこのように言われました。「而して、人間は霊と体とより成る。」(教義と聖約88:15)この霊を私たちは神から受け継いでいるのです。ヘブル人への手紙の著者は、神のことを「たましいの父」(ヘブル12:9)と言っています。すべての人の霊は、文字どおり「神より生れたる息子と娘」(教義と聖約76:24)なのです。

私たちがこのような事柄について深く考えるに当たって、靈感を受けた詩人たちの心打つメッセージや超越した思いに目を向けてみましょう。ある作家は、誕生したばかりの幼な子を「神の家から地上の花に加わった、人間というきれいな咲きたての花」(ジェラルド・マッシー)と表現しています。

詩人ウィリアム・ワーズワースは、真理を次のように歌い上げています。

「われらの誕生はただ眠りと前世の忘却^{ぼうきやく}とに過ぎず。
われらとともに昇りし魂、生命の星は、
かつて何処にか沈みて、
遥^{はる}かより来れり。
過ぎ去りし昔を忘れしにはあらず、
また赤裸^{せきらく}にて来りしにもあらず、
栄光の雲を曳きつつ、
われらの故郷なる神のもとより来りぬ。
われらの幼^{いと}けなきとき、天国はわれらのめぐりにありき。」

(『幼年時代を追想して不死を知る頌』岩波文庫「ワーズワース詩集」田部重治訳、岩波書店)

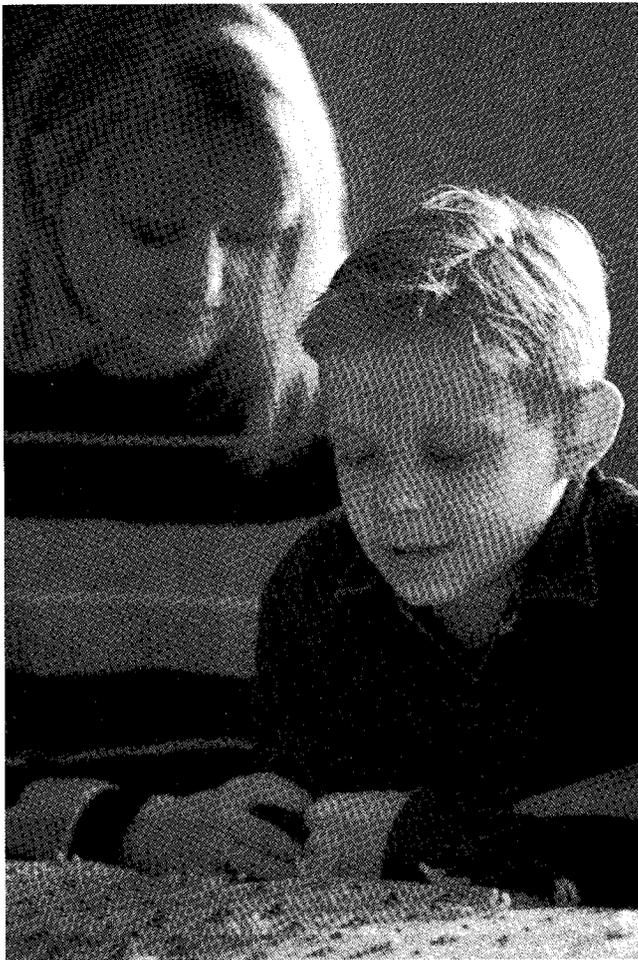
その小さな子供たちを見下ろしながら、あるいは成長していく彼らの手を取りながら、両親はその子供たちを教え鼓舞する責任を、また導きと指示を与え、模範を示す責任を自覚していくのです。こうして両親の自覚が深まっていく一方で、子供たち、特に10代の青少年たちは、「私たちはなぜここにいるのか」という鋭い疑問を抱き始め、「自分はなぜここにいるのだろうか」と心にひそかに問いかけるようになります。

賢明な創造主は地球を創造され、そこに私たちを置いてくださいました。そして前世を忘却の幕で覆い、私たちが試しの生涯を経験し、神が備えてくださったすべてのものを受け取るにふさわしいことをみずから証明できるようにしてくださいました。なんと感謝すべきことでしょうか。

私たちがこの世にあるおもな目的のひとつは、骨肉の体を受け、天の両親を離れてこそできるさまざまな経験をすることです。私たちは実に多くの面で、自由に自分で選択することができます。この世にあつて、私たちは経験という厳しい教師からいろいろなことを学びます。また、善と悪を見分け、人生の苦楽を味わい、自分の決断が自分の行く末を決めるということも学びます。

パウロがピリピ人に、人は「恐れおののいて自分の救^{すくい}の達成に努め〔る〕」(ピリピ2:12)べきであると教えました。一方で主は、「何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ」(マタイ7:12)という黄金律として知られる律法も与えられました。

神の戒めに従順になることにより、私たちは次のイエ



天父は、私たちが無事にみもとに帰れるよう神の導きを受けることのできる手段、すなわち祈りという手段を備えられたうえで、私たちが永遠の航海に送り出してくださいました。

スの言葉の中にある「家」にふさわしくなるのです。「わたしの父の家には、すまいがたくさんある。……わたしは……あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから。……わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである。」(ヨハネ14：2-3)

人生は流れ行き、子供はやがて青年となり、ゆっくりと大人に近づいていきます。この世の旅路を歩みながら、私たちはさまざまな経験から天父の助けの必要性を学ぶのです。次のような靈感あふれる思いを、常に心に留めておきたいものです。「神は父なり、人は兄弟なり。人生は道にあらず、使命なり。」(スティーブン・L・リチャーズ副管長)

父なる神と主イエス・キリストは、完成に至る道を示してくださいました。おふたりは、私たちが永遠の真理に従うことを選び、ご自身が完全であられるように、私たちが完全になることを望んでおられるのです。(マタ

イ5：48；IIIニーフアイ12：48参照)使徒パウロは、人生を、はっきりした目標を目指すレースにたとえています。彼はコリントの聖徒たちにこう言っています。「あなたがたは知らないのか。競技場で走る者は、みな走りはするが、賞を得る者はひとりだけである。あなたがたも、賞を得るように走りなさい。」(Iコリント9：24)

次のような賢明な勧告にぜひ耳を傾けていただきたいと思います。「必ずしも速い者が競争に勝つのではなく、強い者が戦いに勝つのではない。」(伝道9：11)終わりまで堪え忍ぶ者こそが、勝利を手にするのです。

人生というレースについて考えるとき、私はいつも子供時代にしたあるレースを思い出します。たしか10歳のころだったと思います。仲良しの男の子たちとナイフを手にした私は、柔らかい柳の木で小さなおもちゃの舟を作りました。小さな三角形の布で作った帆をかけただけその舟を、少年たちは流れのやや急なプロボ川に浮かし、競走させたのです。岸边を駆けながら、私たちはその小さな舟がときには急流の中で荒々しく、深みの所では静かに帆走して行くさまを見守りました。

このようなレースを繰り返していたある時のことです。私たちにひとつの舟がほかの舟をゴールの方へ導いているように見えていました。すると突然、流れに乗った舟が大きな渦巻きの中に入ってしまったのです。舟はあっという間に傾き、転覆してしまいました。回転しながら流されて行くその舟は、どうしても元の流れには戻れませんでした。とうとう舟は川のふちに追いつまれ、水に浮かぶいろいろなものがくたの中に埋もれてしまいました。

子供時代に作ったその舟には、安定させるための竜骨、方向舵、動力は一切付いていませんでした。そのため、舟の行く先は、抵抗の最も少ない川下しかなかったのです。

そのような舟とは違い、私たちは行く先を導いてくれる、天与の特質を身につけています。私たちは人生という川の流れに、何も付けずに放り込まれたわけではありません。考え、判断し、達成する力を備えて、この世に来たのです。

私たちは天の家を離れ、清く、汚れない幼な子となって地上にやって来ました。天父は、私たちが無事にみもとに帰れるよう神の導きを受けることのできる手段を講じられたうえで、私たちが永遠の航海に送り出してくだ

さいました。そうです。その手段とは祈りです。私たちの心に、細い静かな声として聞こえる、みたまのささやきです。もちろん、私たちの先駆者となって、立派に航海を果した人々の記した聖典も見過ごすことはできません。

この世にあって私たちは、足元がふらつき、笑顔が消え、病の苦痛に身を置くことがあります。すなわち、夏が去り、秋が来てやがて冷たい冬を迎えるのです。この経験を私たちは死と呼んでいます。

思慮深い人ならだれでも、年老いたヨブの要を得た次の言葉を自問したことがあるはずです。「人がもし死ねば、また生きるでしょうか。」(ヨブ14:14)この問いだけは、どんなに払いのけてもまた押し寄せて来ます。死はすべての人にやって来ます。おぼつかない足どりで歩いている年老いた人々に、そして人生の半ばを過ぎたばかりの人々にも死は容赦なくやって来ます。さらに死は、往々にして幼い子供たちの笑い声までも奪ってしまうのです。

一体死の向こうには何があるのでしょうか。死によって何もかも終わりを告げるのでしょうか。死を前にしたある若い夫であり父親である方から、そのような質問をされたことがあります。私はモルモン経を開け、アルマ書の次の言葉を読んで差し上げました。

「さて死んでからよみがえる時までの霊の有様はどうであるかと言うに、ごらん、あらゆる人の霊はそれが善であっても悪であっても、この死ななくてはならぬ肉体を離れるとその霊に生命を与えたもうた神のところへ帰るのである。これは天使が私にお示しになった。

それから義しい人の霊はパラダイスととなえる幸福な有様、すなわち安息と平和な有様に入り一切のわずらいと憂いと悲しみとを離れて息む。」(アルマ40:11-12)

私の友であるこの若い男性は、目に涙を浮かべながら、深い感謝の面持ちで、静かにしかし心を込めて「ありがとう」とささやきました。

イエスの体は、3日間墓の中に横たえられていた後、再び霊と結合しました。こうして、復活された主は不死不滅の肉体をもって歩み出されたのです。「人がもし死ねば、また生きるでしょうか。」ヨブのこの疑問は、マリヤとほかの人々が墓に近づいた時、次のように語る、輝く衣を着たふたりの男の人を見たことで、はっきりと

答えられました。「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ。」(ルカ24:5-6)

以下に挙げる3つの証を含め、復活された主に対する証は、私たちに慰めと理解を与えてくれます。

1番目は、使徒パウロの次の言葉です。「キリストが、聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために死んだこと……葬られたこと……三日目によみがえったこと……ケパに現れ、次に、十二人に現れたことである。そののち、五百人以上の兄弟たちに、同時に現れた。……そののち、ヤコブに現れ、次に、すべての使徒たちに現れ、そして最後に、いわば、月足らずに生れたようなわたしにも、現れたのである。」(Iコリント15:3-8)

2番目は、イエス・キリストを証するもう1冊の書物、すなわちモルモン経に記されている2,500人のほかの羊といわれる人々の証です。復活された主は「群衆に向けて言いたもうた。

『汝らわが^{なんじ}肋にその手をさし入れ、わが手足にある釘あとに触れて、われがイスラエルの神にして全世界の神なること、またわれが世の人の罪を負うて^{ひとたび}一度殺されたるを知るために起ちてわれに近づけ』と。……

人は各々みな近よって親しくこれを見、親しくこれに触れたからみな一せいによばわって、

『ホザナよ。いと高き神の御名を讚美す』と言い、イエスの足下にひれ伏してイエスを拝した。」(IIIニーファイ11:13-14, 16-17)

3番目は、ジョセフ・スミスとシドニー・リグドンの証です。「さて、この子羊に就きて為されたる様々の証の挙句、われらの為す最後の証はすなわち『主は実に生きたもう』こと是なり。

われらは、彼がすなわち神の右に座したもうを見たり。また、御父の生みたもう^{ひとりご}独子なりと証したもう声を聞けり。

すなわち^{もろもろ}諸々の世界は彼の手により、彼の手を経て、また彼に^よ因りて先に作られ、また現に作られ、これに住む者たちも皆神より生れたる息子と娘なることを証したもう。」(教義と聖約76:22-24)

キリストが死に対して勝利を収められたことにより、私たちは皆復活します。すなわち贖われるのです。パウロはこう書いています。「天に属するからだもあれば、



「人がもし死ねば、また生きるでしょうか。」(ヨブ14：14)ヨブのこの問いかけに思いをはせる人々にとって、復活された主に対する証は、慰めと理解を与えてくれる。

地に属するからだもある。天に属するものの栄光は、地に属するものの栄光と違っている。

日の栄光があり、月の栄光があり、星の栄光がある。また、この星とあの星との間に、栄光の差がある。

死人の復活も、また同様である。」(Iコリント15：40-42)

私たちが求めているのは日の光栄です。私たちが望んでいるのは、神のみもとで暮らし、永遠の家族の一員となることです。そして、これらの祝福は確かに得られるものです。(IIネエファイ25：23参照)

私たちはどこから来て、なぜここにいるのか、この世を去った後はどこへ行くのか。この万人の抱く疑問は、もはや疑問ではなく、はっきりと解決されたのです。天父は、戒めを守る人々を喜ばれるだけでなく、墮落した人々や気乗りのしない10代の子供たち、気まぐれな若者たち、怠慢な親たちのことも深く気にかけておられます。また、主はこれらの人々を含めすべての人に、やさしくこう呼びかけておられます。「戻っていらっしゃい。さ

あ立ち上がってお入りなさい。家に入って、私のもとに来なさい」と。主の聖なる昇栄への招きに応じるとき、なんと大いなる永遠の喜びが私たちに用意されていることでしょうか。

主は真理を教える教師、いやそれ以上のお方であることを証します。主は完全な生涯という模範を示されたお方であり、病を癒される偉大なお方でもあります。そして何より、主は文字どおり、世の救い主、神の御子、王の王、イスラエルの聖者、よみがえりの主であられるのです。こうおっしゃっています。「われはイエス・キリストなり。予言者らがこの世に来ると証をしたるその者なり。……われは世の光にしてまた世の生命なり。」(IIIネエファイ11：10-11)「われは始めなり終りなり。われは生ける者なり殺されたる者なり。父と汝らの間の仲保者なり。」(教義と聖約110：4)

主が証されたように、私も皆さんに証いたします。「主は実に生きておられます。」□

話し合いのポイント

1. 日々の生活の中で緊迫した状況が生じると、真理と日常生活のこまごまとした事柄は、やがて切り離されるものである。

2. 人類が真剣に考えるべきことのひとつは、「私たちはどこから来たのか」という質問である。数々の予言者は聖なる創造主について証している。

3. 2番目の普遍的な質問は、「自分はなぜここにいるのか」である。予言者たちは、人生の目的についても証している。すなわち、肉体を受け、経験を積み重ね、善と悪を見分け、自分の決断が自分の行く末を決めることを学ぶ、という目的について証している。

4. 「この世を去った後に私たちはどこへ行くのか」というもうひとつの偉大で普遍的な質問は、聖典の中、とりわけ復活された主イエス・キリストに関する記述の中ではっきりと答えられている。

5. 万人の抱くこれらの疑問は、もはや疑問ではなく、はっきりと解決されている。主はすべての人々に、やさしくこう呼びかけておられる。「戻っていらっしゃい。さあ立ち上がってお入りなさい。家に入って、私のもとに来なさい」と。

1988年8月19日、金曜日のことです。アルゼンチンのコルドバに近いリオセバヨスの地方公安局で、私は公安官としての任務に就いていました。地元の医療センターに勤める看護婦から電話で援助の要請を受けたのは、その日の朝9時半ごろでした。地域でわずかしかない救急車のうち1台が公安局にあったため、そのような通報は珍しくありません。

生まれて5カ月の女の子がひどい脱水症状を起こしているとのことで、治療に必要な器材の整ったコルドバの小児科病院まで緊急に運んでほしいと、看護婦が言います。救急車の運転手と私は直ちに出勤し、母親と赤ん坊を救急車に乗せました。赤ん坊は高熱で、息遣いも荒く、おびえたように泣きわめいています。目は大きく見開かれ、苦しそうな様子が、表情からうかがわ

れます。

リオセバヨスからコルドバの病院までは、ほぼ40キロの道のりです。15キロほど来たところで、突然ボンネットの下から蒸気と熱湯が噴き出しました。運転席の計器盤には非常灯が付き、水温計はオーバーヒートを示しています。考えられないような故障です。その救急車は点検を終えたばかりでした。私たちはやむなく道路端に車を止め、慎重にボンネットを開けました。

エンジンとラジエーターをつなぐホースが何か所も裂けていて、破裂寸前です。「これじゃ走れない。」運転手のオスカーがつぶやきました。「また走ろうもんなら、今度は完全にエンストだ。」やけになって、彼は車のボディをたたきました。

解決策を見つけようと、私は必死で頭を働かせました。無線機はありませ

ん。助けを求めようにも車さえ走っていません。無人の荒野に私たちばかりが立ち往生しています。その間にも、赤ん坊の容態は悪化するばかりです。

私は意を決して、オスカーに言いました。「とにかく行けるだけ行って、助けが得られる所まで行けるかどうか、やってみようじゃないか。神を信頼しよう。病院まで行けるといふ信仰を持つとう。」

オスカーはためらっています。少しでも走ればホースは破裂して、病院には到着できないかもしれないのです。あと少し待てば、エンジンが冷却するかもしれません。しかし、赤ん坊の容態が悪化することも明白です。私はもう一度オスカーに言いました。「神を信じよう。病院に着けるように助けていただけるはずだ。」

私は赤ん坊を抱いた母親も励まし

グスタフォ・アドルフォ・アバロス

信仰に頼って

した。話しかけながら、希望を失わなければ間に合って赤ん坊を救うことができると、何者かがささやいているような気がしました。決意と自信を込めて、「だいじょうぶ、間に合います」と断言しました。

エンジンを始動させ、走り出しました。水温計の針はそれほど高くありません。私たちはそのまま走り続けました。ボンネットの下から蒸気も噴き出していません。注意を集中して運転しました。そして永遠に思えるほどの時間が過ぎ、ついに病院に到着したのです。

赤ん坊の治療に当たった医師がこう語りました。「あと少し遅ければ、死んでいたかもしれない。想像以上に、容態はひどかったからね。」

天父の助けによって、私たちは間に合ったのです。天父は確かに、道中、私たちとともにいてくださいました。

リオセバヤスへの帰路、私たちは先ほどの出来事について語り合いました。「信じられないような話だ。病院にたどり着けたってことが、まだ信じられないよ。」オズカーがそう言いました。

奇跡を目の当たりにしたのだと私が言うと、オズカーはまじまじとこちらを見つめてほほえみ、うなずきました。「神が助けくださるように、道中ずっと祈っていたよ。」そう私が言うと、オズカーもこう打ち明けてくれました。

「実は、私もさ。あんなに一生懸命

に祈ったのは、生まれて初めてだよ。まさに神がなされたことだね。」

後日、この出来事を思い出しながら聖典を読んでいると、聖書の次の一節に目が留まりました。

「使徒たちは主に『わたしたちの信仰を増してください』と言った。そこで主が言われた、『もし、からし種一粒ほどの信仰があるなら、この桑の木に、『抜け出して海に植われ』と言ったとしても、その言葉どおりになるであろう。』（ルカ17：5-6）

どのような時でも、信仰を増し加え、主に頼ることができるように願っています。□





パラグアイの開拓者たち



日 曜日の夜。パラグアイのアスンシオンにあるアビリオ・サマニエゴ兄弟と奥さんのマリア・エレナ姉妹の家では、家族のにぎやかな声があふれています。まだ独身の3人の子供に加えて、結婚している3人の子供とその家族も来ています。食事が終わって、孫たちは遊びに興じ、大人はくつろいで語り合います。きょうは、伝道を終えて帰還したばかりの息子が教会で伝道の報告と証をした日なのです。そんなことから、今夜は思い出話に花が咲き、からかい合っては笑い声がわき上がります。

教会と家族が今夜の話題の中心になっていますが、それは決して珍しいことではありません。そもそも、20年近く前にサマニエゴ兄弟が教会に心を引かれたのは、教会が家族を大切にするように教えていたからです。「宣教師たちが私の家族を愛してくれているのがわかりました」と、兄弟は思い出して言います。「そして、私にも自分の子供をどう愛すべきか教えてくれました。そのた

めに私の心は和らぎ、福音のメッセージを受け入れることができたのです。」家族は1974年にバプテスマを受けました。そしてサマニエゴ兄弟は家族の族長(patriarch)としてのあり方を学び、今では、ステーキ部の祝福師(patriarch)として召されています。

教会がもたらしてくれた祝福について家族で話し始めると、皆、大きな愛に包まれているような温かさを感じました。涙が流れ、証が自然に口をついて出ます。

家族は、一番近い教会から5キロ離れた所に住んでいた時のことを思い出しました。「8人家族でしたから、バスの運賃は相当な額になります」と長女のイエニ姉妹は言います。今では彼女も4人の子供の母親で、ご主人のグレゴリオ・フィゲレド兄弟はステーキ部長を務めています。「ですから、いつも片道2時間かけて、歩いて教会に通っていました。土曜日の初等協会と青少年の活動にも同様に通いました。当時、日曜の集会は午前と午後に分かれていましたので、1日2往復、合計20キロ歩いたことになります。暑い盛りには、お弁当を持って行き、集会と集会の合間に木陰に座って食事をしたこともありました。バプテスマ以来、集会を欠席したことは一度もなかったと思います。」今でも、子供たち6人とその家族は皆信仰深く、活発に教会に集っています。

左——サマニエゴ家族。20年近くもの間、教会は彼らの生活に大きな祝福をもたらしてきた。下——最近では都市を離れた農村に多くの支部が作られている。



息子たちは、7、8歳のころから白いシャツとネクタイ姿で専任宣教師たちとともに伝道したことをよく覚えています。15歳になる娘カロリーンを含めて何人かは、ステーキ部宣教師として働いたこともあります。そして今、サマニエゴ家の息子は3人も、専任宣教師として伝道を終えたことになるのです。

娘たちは、末日聖徒の若い男性が少なかった時母親から教会員とデートをするように勧められたと言います。「きつと、あなたのためにすばらしい若い男性を育てている母親がどこかにいるはずだから」とサマニエゴ姉妹はよく娘たちに言い聞かせたそうです。そして現在、既婚の3人の子供たちは皆、神殿結婚の祝福にあずかっています。

サマニエゴ姉妹は早朝セミナーを教えた年月を振り返ってこう語っています。「毎朝5時に起きて、私がセミナーを教えている間に、夫は家族と生徒たちの分の朝食を準備してくれたのです。そして、学校の始業時間に間に合うように全員を7時までに送り出したのです。」この責任を解任されるまでに、彼女は自分の6人の子供全員のセミナー教師を務めました。また彼女は、初等協会、日曜学校、そして当時の青少年組織であったミューチャルでも自分の子供たち全員を指導する立場にありました。現在彼女は、ワード部扶助協会会長に召されています。

だけれど、サマニエゴ家族がほかの「開拓者の家族」とともに礼拝堂の建設をしている写真を収めたスクラップブックを持ち出してきました。そして、教会員の模範によって教会がパラグアイで尊敬をもって受け入れられるようになったことを話し合いました。

もう夜も更けましたが、帰ろうとする人はいません。思い出が思い出を呼び、いくつもの話題が口をついて出てきます。サマニエゴ兄弟は「私は本当に恵まれている」と穏やかな口調で語ります。「今晚、子供とその家族に囲まれて話を聞くことができ、本当にうれしいです。『人類が現世に在るのは幸福を得んためである』(IIニーファイ2:25)という聖句がありますが、きょうの私の心境そのものです。」

堅固な基礎

パラグアイの教会は、サマニエゴ家族のような多くの開拓者たちの築いた堅固な基礎の上に建てられています。彼らは、喜んで犠牲を払い、発展が停滞しているように思える時期にも、たゆまず奉仕し続けたのです。

パラグアイでは長年、教会の成長の著しい南アメリカのほかの地域に比べて、遅れを取っているかのように思える時期がありました。パラグアイは1949年から伝道部が分割される1977年まで、ウルグアイのモンテビデオに本部を置く伝道部の一部でした。1979年2月にパラグアイ初のステーキ部が、そして翌1980年6月には2番目のステーキ部が組織されました。そして、1992年11月には3番目のステーキ部が誕生しています。

現在パラグアイの末日聖徒は1万3,000人を数えます。その中には数十年來の教会員もいれば、数日前にバプテスマを受けたばかりの会員もいます。しかし、教会歴の違いはあっても彼らは皆開拓者なのです。なぜなら、開拓者とは聖霊のみたまに感じてその生活を変え、確固とした決心と信仰をもってその導きにこたえる人だからです。

「帰国する決心をしました」

1967年、カルロス・エスピノラ兄弟は実に快適に暮らしていました。17歳の時にバプテスマを受け、ウルグアイで伝道した彼は、ユタ州プロボにあるブリガム・ヤング大学で学位取得に向けて勉学に励んでいました。その上、平和部隊(訳注——合衆国政府機関のひとつ。発展途上国の援助・教育のため、ボランティアを派遣している)のためにパラグアイで話されているグアラニー語とスペイン語の語学指導書の作成をして、彼にとってはかなりの高額と思える収入を得ていました。

また、ウルグアイ人の婚約者ネリーが間もなく到着することになっており、そうすればこの夢のような生活は完全なものになるはずでした。ふたりはソルトレーク神殿で結婚して、カルロ





カルロス・エスピノラ兄弟と奥さんのネリー姉妹、そして子供たち。
左からアルトゥーロ、アルバロ(現在ウルグアイで伝道中)、アリエルとアレハンドラ。
「子供たちは経験を通して証を強めています」とカルロスは語っている。
左——アスンシオンのワード部タレントショーで踊りを披露する教会員。

スが学業を終えれば、アメリカに居を構えて、この上ない生活を享受するはずだったのです。

しかし、カルロスは何かが間違っているという、説明のできないものを感じ始めていました。そこで、みたまの導きを求めて祝福師の祝福を受けることにしました。「祝福文には、祖国の同胞が教会を知ることができるように助けなさいとあり、また、私が彼らの指導者になるだろうと約束されていました。祝福を受けてから、この言葉について何度も繰り返し思い巡らしました」とカルロスは言います。

彼は祝福文をどう解釈すべきか知るために、断食して祈りました。そして、ようやく「みたまによる確認を経て、自分の居場所はここではないと感じるようになりました。主が私を本当に必要としておられるのは南アメリカかであると感じたのです。それで私は帰国する決心をしました。」

ビザはもう1年有効でしたが、カルロスはアパート、家具、学業、そして仕事もすべて捨てて帰国しました。ネリーとはウルグアイで結婚し、そこで学業を続け、経営学と建築学のふたつの学位を取得しました。そして、アメリカにいた時の3分の1以下の給料の仕事に就いた

のです。

「友人は頭がどうかしていると言いましたが、私はこう答えました。『いや、ぼくはこれで満足なんだ。自分のしたいようにしているんだからね。』それに、私にはそうする理由もはっきりわかっていたのですから。この地にとどまることで得た祝福は、祝福師の祝福にある数数の約束を成就してくれています。」

1979年、カルロスはパラグアイ初のステーキ部長に召されました。約10年後にはパラグアイ人ではふたり目の伝道部長を務めました。(チリ・アントファガスタ伝道部の開設時の初代伝道部長)また、職業的にも恵まれ、20年間ウルグアイとパラグアイの管理監督事務局で働いてきました。そして現在はパラグアイの管理監督会にあって地区監督を務めています。

「ここでの生活にとっても満足しています」とネリー・エスピノラ姉妹は言います。「私たちにとって教会の兄弟姉妹は実の家族のようなものです。主は私たち夫婦と子供たちに霊的に大きな祝福をくださいました。」姉妹はご主人のカルロスとともに神殿で結び固められ、現在4人の子供、アレハンドラ(22歳)、アルバロ(20歳)、アリエル(16歳)、アルトゥーロ(14歳)に恵まれています。



赤ちゃんを抱くホルヘ・アレナス兄弟と奥さんのローサ姉妹と支部の会員たち。自宅前で。
 アレナス家は、40世帯の末日聖徒で構成されているニヴァクレボケロンという集落に住んでいる。
 住民たちはモルモン経のニーファイ人の都市にちなんで、村を「ラ・アブndanシア」
 (「バウンテフル」に相当するスペイン語)と呼んでいる。

ふたりは、伝道地にあっても家庭にあっても、家族としてすばらしい経験を共有してきたと話してくれました。

カルロスは言います。「私たちにとって子供たちは最も貴重な受け継ぎです。子供たちはそれぞれ、自分の証を強めるのに役立つ経験をしていますし、一人一人が自分自身の証の力で信仰生活を送っているのがはっきりとわかります。」

「息子のことをいつも忘れずにいます」

広大な荒野グランチャコー草原は、パラグアイ北西部の大半の地域を占め、住む人も少ない地域です。この草原の奥深い所に、末日聖徒の家族が40家族ほど暮らすニヴァクレボケロンという小さな集落があります。彼らはニヴァクレ・インディアンで、この村に「ラ・アブndanシア」(モルモン経の中の「バウンテフル」に相当するスペイン語)というニックネームを付けています。ほとんどの人はニヴァクレ語しか話せませんが、中にはスペイン語を少し話せる人たちもいます。彼らはミストーラというもっと大きな、より奥地にある末日聖徒のニヴァクレ族の集落から移ってきたのです。(テディー・

E・ブルアートン長老『ミストーラ村——霊のオアシス』「聖徒の道」1990年9月号, pp.10-15参照)夫婦の宣教師たちは、「ラ・アブndanシア」の聖徒たちが村の両端に井戸を掘るのに協力してくれました。また、この宣教師たちがヤギの飼育と作物の種まきから収穫の仕方まで指導してくれたおかげで、自給に足る収穫を得、余剰分を売ることもできるようになりました。

この支部には一部屋だけの木造の礼拝堂があり、灯油ランプの明かりで集会が開かれています。ほとんど毎晩のように何かの集会が行なわれています。セミナリーのクラスが、引き続き夜の聖歌隊の練習になることも多いようです。青少年も大人も聖歌隊に参加し、ピアノの伴奏もなしに美しい四部合唱で賛美歌を歌うのです。

礼拝堂の外には、手作りのバプテスマフォントがあります。また、男の子たちがサッカーを楽しむ広場もあります。庭と木々、そして小さな墓地もあります。

その墓地には、ホルヘ・アレナス兄弟と奥さんのローサ姉妹の幼い息子、イレネオ・アレナスが眠っています。1989年の8月、ホルヘとローサは3人の小さな子供を連れてミストーラを出発し、ほかのふた家族とともにブエノスアイレス神殿までの2,100キロの行程をバスで旅し

ました。「ミストーラを出た時、赤ん坊だったイレネオは風邪で具合がよくありませんでした」とホルヘは言います。「プエノスアイレスに着いた時にはもっとひどくなっていました。とても寒かったのです。私たちは神殿に行き、家族の結び固めを受けました。イレネオの具合は一向によくなりませんでした。」

パラグアイに戻ると、家族は数時間先のミストーラに行くより「ラ・アブンダンシア」にとどまることにしま



右——ニヴァクレボケ
ロンの会員たち。

右下——ホルヘ・アレ
ナス兄弟と奥さんのロ
ーサ姉妹、娘のドミニ
ガ(9歳)、バシリカ
(7歳)、マリベル(2
歳)。

下——支部の子供たち。
家に水を運んでいると
ころ。



した。イレネオの容体はさらに悪化しました。「もう手の施しようがありませんでした」とホルヘは言います。5日後、イレネオは息を引き取りました。

「私は息子を抱きながら、神殿で私たちが結び固められたのはどれほどありがたいことなのかを考えました。私は、今あの子が天父のみもとにいることも、いつかまた会える日が来ることも知っています。そして、息子のことをいつも忘れずにいるからこそ、天父の戒めをすべて守ろうと努力しているのです。」

ホルヘとローサは「ラ・アブンダンシア」に定住しました。ホルヘは以前、支部長を務めました。現在は長老定員会会長会の一員であり、聖歌隊の指揮者補助とセミナー教師も兼任しています。ふたりの間にはドミニガ(9歳)、バシリカ(7歳)、マリベル(2歳)の3人の娘がいます。

ホルヘは言います。「宣教師たちから初めて福音を聞いた時、これが聖霊の導きなのではと思うものを感じました。それ以来頻繁に、特にモルモン経を読んでいる時に、同じみたまを感じてきました。イエス・キリストはここアメリカ大陸で私たちの先祖に姿を現わされました。

人々はしばらくの間戒めに従いましたが、後に不信仰に陥りました。しかし私は、教会でどのような召しを受けても喜んで奉仕していきたいと思っています。それは、教会で奉仕するとき、主が私たちを祝福してくださることを知っているからです。イエス・キリストが私たちのために命を捧げられたことを知っています。主は私たち



左——人里離れたイサベリノ・ヒメネス兄弟宅への道を悪路が阻む。
下——クリスチャン・トゥリーニ長老と同僚がイサベリノと出会ったのは、心の正直な人を見つけられるようにという、トゥリーニ長老の祈りの直後だった。

のために復活されました。そして、私たちの罪を赦してください。私は主が生きておられることを知っています。」

「あなたたちを探してやって来たのです。」

コロネルオビエドの町では、パラグアイ出身の宣教師、クリスチャン・トゥリーニ長老が主に祈りを捧げていました。自分と同僚のマシュー・ポーター長老が、福音を聞くように備えられた人を探し出せるよう助けを求めていたのです。祈り終わると、ふたりは部屋を出て2区画ほど歩いて行きました。すると、ひとりの農夫が駆け寄ってきました。そしてグアラニー語でこう言ったのです。「あなたたちは末日聖徒の宣教師ですか。あなたたちを探してやって来たのです。あなたたちの教会が真実だとわかって、ぜひバプテスマを受けたいと思ったからです。」

その農夫の名はイサベリノ・ヒメネスといました。数年前、遠く離れた町で、奥さんのエスタニスラダと



彼女の家族と一緒に、宣教師から福音を学んだことがありました。奥さんの家族はバプテスマを受けましたが、イサベリノは自分はもとより奥さんのバプテスマにも強硬に反対しました。「妻には『この町を出て、もっとよい生活を探そう』と言いましたが、実のところ福音から逃れたかったのです。」

イサベリノとエスタニスラーダはパラグアイのジャングルを分け入った遠隔の地に引っ越しました。「ジャングルを通して長い長い道のりを歩いて行きました。目的地に着いた時にはほとんど無一物でした。服といったら着ているものだけだし、ベッドもなく床に寝ました。食べ物も底をついていました。」イサベリノは土地を開墾して、作物を育てようと一生懸命に働きました。しかしそんな時に、足に負った傷が化膿してしまいました。さらには息子のひとりも同様の傷を負ってしまったのです。土地の医者^かの治療も効果は上がりませんでした。「私は非常に意気消沈し、ふさぎ込んでいました。そして人生を変えたいと望みました。」

やがてエスタニスラーダの家族も町を離れ、近くに住めるように引っ越してきました。そんな奥地に来ることで教会との接触を失うことになっても、彼らは引き続き福音を実践していました。「妻の兄はいつも聖典を読んでいた」とイサベリノは言います。「ある日私が『足が痛くて眠れない』とこの義兄に言うと、彼は天父に祈るべきだと言うのです。そこで『どうやって祈るんですか』と尋ねました。義兄は祈りについて教えてくれました。そして、心の内を何もかも主に打ち明けることの大切さも教えてくれました。」

「その日、私はひざまずいて天父に祈り、赦しを請いました。そして、息子と私の足を癒してくださるように願いました。家族を養うために働かなければならないこともお話ししました。主に自分の思いをすべてお話ししたことを妻に伝えると、彼女はとてもうれしそうにほほえみました。」

以来、妻の両親から教会について学ぶようになりました。モルモン経と『福音の原則』と一緒に読みました。イエス・キリストのみ名によって祈ることも学びました。やがて、私と息子の足の傷は癒されました。」

このころにはイサベリノとエスタニスラーダはバプテスマを受けたいと願うようになっていました。しかし、どうしたらよいかわかりません。初めて宣教師に福音を聞いた町に戻るのとはとうてい無理でした。結局、足の傷が癒されてから4年たった時、イサベリノは教会と宣教



PHOTOGRAPH COURTESY OF CRISTIAN TURRINI

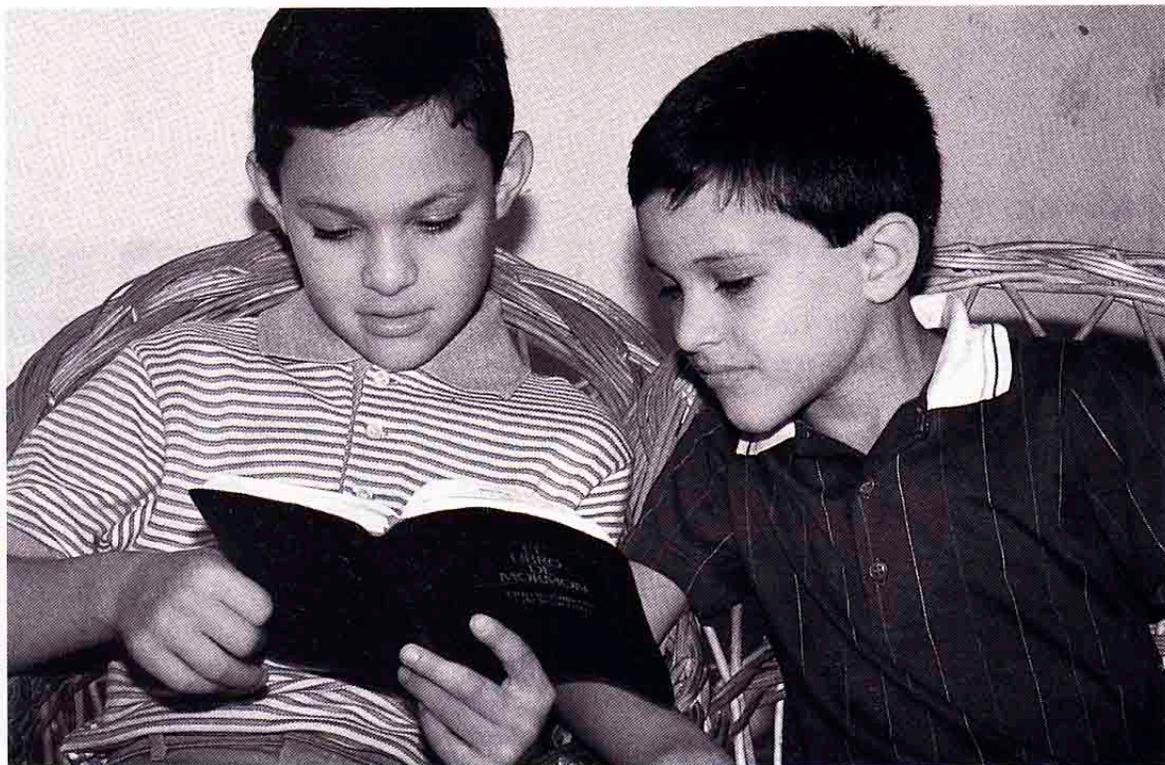
イサベリノとエスタニスラーダ(後列中央)とともにバプテスマを受けたふたりの子供と養女(後列左から2人目)、それにエスタニスラーダの弟と妹。宣教師たちと。

師を探すために徒歩とバスで4時間かけて、一番近い町のコロネルオビエドまで出かけることにしました。

「停留所でバスを降りると、自転車に乗っていた男の子に末日聖徒イエス・キリスト教会がどこにあるか尋ねました。ずっと遠くだと教えてくれました。そこから町の中心に向かって4区画ほど歩いて男性に尋ねると、知らないと言います。私は希望を失わないように、天父に助けを求め、祈りました。」

今度は街角で女性に尋ねました。するとその人は、「ここで待っていてください。宣教師を知ってるんですよ。もうすぐここを通るはずですから」と言いました。そこで20分くらい待っていると、その女性がこう言いました。「ほら、宣教師たちがやって来ましたよ。」そして、宣教師を見つけると、私は車の流れには目もくれず、道路を横切って宣教師の所に飛んで行きました。車が来ていたら命を落としていたことでしょう。でも、私はそれくらい宣教師と話したかったのです。」

宣教師たちは喜んでヒメネス家族を教えてくださいました。まず、伝道部長から遠く離れたジャングルまで赴く許可を受け、朝6時にコロネルオビエドからバスに乗り、近くの町まで行きました。その町でイサベリノと落ち合い、別のバスで30分。そこからは徒歩でもう1時間半行き、



右下——ディオニシオ・アギレラ兄弟と奥さんのグラディス姉妹は、
宣教師が訪ねてくるのを待ちかねてみずから宣教師の所に出向いて行った。
現在、息子のエドワルド(9歳)とダビッド(7歳)は伝道に備えてモルモン経を勉強している。
左下——アスンシオンの繁華街の風景。



朝10時にはヒメネス家に到着しました。「あれほど歩いたことはありません」とトゥリーニ長老は言います。「パラグアイ人の私でも、あんなジャングルに足を踏み入れたことはありませんでした。野生動物や、蛇や鳥を随分目にしました。ヒメネス家に着くと、家族は私たちをまるで天使のように扱ってくれました。子供たちは私たちに飛びついてきましたし、大人たちは涙を流していました。みんなで私たちの無事を祈り、昼食を準備してくれていたのです。」

その日、宣教師は集まった30人ほどの人々に3つのレッスンを教えました。その中には、教会員でありながらも、再び教会と接触する希望を失いかけていたエスタニスラダの家族も含まれていました。また、関心を持った近所の人たちもいました。3時間教えた後で宣教師は帰って行きました。

翌日はヒメネス家族がコロネルオビエドに出向きました。雨が降っていて、さらに小さな子供も連れていたため7時間もかかりました。長老たちが残りの3つのレッスンを教え、次の日、1991年9月8日の日曜日に、イサベリノとエスタニスラダはバプテスマを受けました。また、子供のうちアニバルとディアナのふたりと養女、さらにエスタニスラダの弟と妹もバプテスマを受けました。夫妻には、ほかにデルリスとエマヌエルという年少の子供がいます。

イサベリノは言います。「バプテスマの水に沈められた時、どういうわけかまるで一瞬死んだような気がしました。そして水から上がると、あまりの喜びにうれし涙をこらえることができませんでした。宣教師が確認の儀式をしている時には、なんとも言えないすばらしい気分でした。その後、立ち上がって私は証を始めましたが、幸福感で胸がいっぱいになり、続けることができませんでした。以来、友人、隣人のすべてと証を分かち合っています。みんなにも私と同様の喜びを味わってほしいのです。」

「こちらから出向いて行ったのです」

アスンシオンに住むグラディス・アギレラ姉妹とご主人のディオニシオ兄弟は、何年も前から末日聖徒の宣教師たちを町で見かけては、一体どんな人たちで、何をしているのかと考えていました。「宣教師は一度も我が家のドアをたたいたことはありませんでしたが、私たちは来てくれればいいのと思っていたのです」とグラディ

スは言います。

「あの人たちは、この国の人々のために熱心に働き、犠牲を払っているのだから、何か協力した方がよいのでは、と妻に言いました」と自動車整備工をしているディオニシオは説明します。「そこで、結局、宣教師の方からではなくこちらから出向いて行ったのです。」

夫妻はふたりの北アメリカ出身の姉妹宣教師を家に招待しました。そして数週間後の1991年7月、ふたりはバプテスマを受けました。それからさらに2週間後、ディオニシオとグラディスはそれぞれ、アナイ支部の若い男性会長、若い女性会長として働き始めました。

「私たちは当時結婚12年目で、幸せに暮らしていました」とグラディスは言います。「でも、いつも何か欠けていると感じていたのです。バプテスマを受けて、今まで知らなかったさまざまな新しいことを経験するようになりました。」たとえば、初めて断食した時に感じた畏敬の気持ち^{いびい}を、ふたりは今もはっきり覚えています。それまで知らなかったみたまを味わったのです。加えて、息子さんが受けた癒しの祝福についても語ってくれました。

「いまや私たちの幸福は完全なものだと感じています」とグラディス・アギレラ姉妹は言います。そして現在、ふたりの息子、エドワルド(9歳)とダビッド(7歳)を将来の伝道に備えています。家のほんの1区画先には末日聖徒の教会堂が新築されたばかりです。彼女はこう語っています。「バプテスマの時の自分の証はまだ弱いものでした。でも今は、日々強くなっています。」

「ミー・コロネル」

その人物は風貌^{ふうぼう}に威厳がありますが、まったく威圧的ではありません。人々にはまるで慈愛に満ちた祖父のように振る舞い、親切で、愛に満ち、優越感など少しも感じさせません。それでいながら、パラグアイ国軍の退役大佐である彼は、家族や友人といるときや、教会の召しを果たしているときのように、国の高級官僚や軍の指導者たちとも打ち解けて交わることができるのです。教会の内外を問わず大いに尊敬されている彼を、人は敬愛を込めて「ミー・コロネル」(「私の大佐」の意)と呼んでいます。

今から30年前の1963年、ルイス・A・ラミレス兄弟はパラグアイ国軍の若き少佐として軍務に就いていました。ある日アスンシオンの家に帰ると、テーブルの上にモル

アスンシオンの自宅で。ルイス・A・ラミレス大佐と奥さんのホルテンシア姉妹、ウルクアイでの伝道を終えて帰還したばかりの娘リセット姉妹。

モン経が載っていました。それまでに見たことのない本で、一体だれが置いたのか知りませんでした。本を開き、目を通してみました。大佐は当時を振り返ってこう述べています。「これは『神のみ言葉』であると書いてありました。その言葉が深く私の心に突き刺さりました。それで読み始めたのです。興味は深まるばかりでした。」

実際すばらしいタイミングでした。「それまで3カ月の間、神に近づく必要を感じていました」と彼は言います。自分の宗教には満足していなかったものの、何がしかの答えを得られればと願って、彼は毎週日曜日、教会に通い始めていたのです。「神にも祈り始めました。それまでに教えられていた祈り方ではなく、後に宣教師が教えてくれた祈り方に非常に似た方法で。このようなことを3カ月続けていたのです。モルモン経を見つけたのはそんな時でした。」

家族に「だれがこの本を持ってきたんだね」と尋ねました。すると15歳の親戚の子供が、2、3日前に友人の家でふたりの宣教師からもらったと言います。「私はモルモン経を読み続け、読むほどに興味は深まりました。そこでその子に、『今度、宣教師を見かけたら、ここに招待してくれないか』と頼んだのです。」

数日後宣教師がやって来た時には、ルイスはほとんどモルモン経を読み終えていて、質問を山ほど抱えていました。その後の3週間に、宣教師はルイスと奥さんのオルテンシアに1度にふたつのレッスンを教えていきました。そして、3度目の訪問を終えた土曜日には、ふたりともバプテスマを受けました。その結果、友人や親戚も福音に興味を持ち、バプテスマを受けることになりました。そして時を置かずして、「少佐」はアスンシオンのモロナイ支部の「支部長」に召されました。

ラミレス兄弟は、軍人としての長いキャリアの間に、外国の地で15カ月間単身赴任を余儀なくされたこともありました。その寂しく困難な時も、「福音によって大いに助けられた」と兄弟は言います。「頻繁に祈り、断食もしていると、離れていても家族を非常に近く感じることができました。また、自分の身の安全を一点の疑いもなく確信できました。そして、みたまによって、主が助けていてくださるのを感じました。」

バプテスマから6年後の1969年、ラミレス兄弟は大佐に昇進しました。そして1975年の定年まで士官学校で教鞭を執りましたが、その間一度も末日聖徒である事実を隠したりしませんでした。長年にわたって教えた学生



PHOTOGRAPHY BY LEONOR GARCIA



の中には、ラミレス兄弟の模範によって教会に関心を持ち、バプテスマを受けた人たちもいます。

退役すると、ラミレス兄弟姉妹は子供たちを連れてユタ州に渡り5年間滞在しました。その間に兄弟はブリガム・ヤング大学で学位を取得しました。そしてパラグアイに帰国すると間もなく、パラグアイ人初の伝道部長に召されました。伝道地は祖国パラグアイでした。

1984年に解任されてからも、ラミレス大佐は副伝道部長やステーキ部長として会員たちを強め、へき地の地方部や支部に教会の基盤を確立するために尽力してきました。それに加えて、引き続き教会への助言者としてパラ

グアイ政府との橋渡し役を務め、ほかのだれにもまねのできない方法で門戸を開いてきたのです。しかし、いつも謙虚なラミレス兄弟は、自分の果たしてきた役割について「ほんの少しお役に立てたかもしれません」と控えめに言うだけです。しかし、ともに奉仕したことのある人ならだれでも、教会の協力者を得る彼の非凡な能力と、国の指導者たちに対する教会の親善大使としての偉大な力をよく知っています。

教え子や元の同僚たちの中には、国の要職に就いている人たちもいます。その人たちも末日聖徒としてのラミレス大佐を記憶にとどめ、尊敬しています。「ときどき、今は少佐や大佐になっている教え子たちに出会うと、『教会はどんな調子ですか』と立ち止まって声をかけてくれます。いつも『絶好調だよ』と答えるのですよ。」

「間近に迫っています」

確かにパラグアイの教会は「絶好調」です。そしてパラグアイの教会の歴史は今もなお、新たな改宗者だけでなく末日聖徒の2世、3世によっても書き継がれているのです。最近3番目のステーキ部が設立されたこともあって、教会員は大いに楽観的です。カルロス・エスピノラ兄弟はこう言っています。「私たちは教会の支部がふたつしかなかった時代からここに住んでいます。パラグアイでの教会が偉大な成長を遂げる日は間近に迫っていると感じています。エズラ・タフト・ベンソン大管長がこの地を伝道のために奉献された時、パラグアイには多くのステーキ部ができると約束してくださいました。その日はもうすぐです。」□



なぜ自分は 走っているのだろうか

七十人

アンヘル・アブレア長老

皆さんは、偉大な賜である自由意志を賢明に使っているのでしょうか。あるいは、これまでに自由意志を用いずに人の言いなりになってしまったことはないのでしょうか。

アルゼンチンにはこんな話があります。犬の群れが町角に集まって何やら話をしています。犬として生きることがどれほど大変でつらいことか、と話は尽きません。集まる犬の数も増え、その話し声もだんだん大きくなってきます。すると突然、一番鼻の利く犬が叫びました。「野犬狩りだ！」その瞬間、動物たちは一目散に四方八方へ散っていきました。通りをふたつほど逃げたところで、そのうちの1匹が立ち止まって、こう言いました。「なぜ自分は走っているんだろう？ ぼくは猫なのに。」

これは子供向けの話ですが、そこには私たち皆が考えなければならない大切な要素が含まれています。それは、私たちがこの猫のような行動をとることが往々にしてあるということです。ほかの人の言動に左右されてしまって、神が私たちにくださった最大の賜のひとつである、みずから選択するという賜を無駄にしているのです。

私たちには皆、自由意志が与えられています。私たちが昇栄できるかどうかは、この自由意志をどう行使するかにかかっています。私たちには、天父のみ前で、自分が自由意志を賢明に使うことによってどのように成長できたかを報告する責任があるからです。

ここでしばらく、自分が自由意志をどう活用しているか、考えてみましょう。それはちょうど、「なぜ自分は走っているんだろう」と自問してみるようなものです。

人は、みずからの選びによって、自分の行く末を自分で決められることになっています。これは永遠の律法です。人は種をまき、それに応じて刈り取るのです。(ガラテヤ6：7参照)

無精や怠惰という種をまいていながら、献身的に熱心

に努力した者にしか与えられない祝福を望むことはできません。私たちは、日々の生活の中で何を選択するかによって、天父と永遠に住まえるようになるための備えをするか、それとも、永遠の祝福を私たちから奪うような道を滑り落ちるかを決めているのです。レーマン人サムエルは、この考え方を力強く、また真心から次のように語っています。

「それであるから記憶せよ、私の兄弟たちよ。およそ亡びる者は自分から亡び、悪を行う者は自分で悪を行う。なぜならば神はあなたたちに知識を与えて自由な者にしたもうから、あなたたちは自由であって、思うままを行うことを許されているからである。」(ヒラマン14：30)

私たちが幸福になれるかどうか、そして心の平安を得ることができるかどうかは、すべて、私たちの日々の選びにかかっています。また私たちは、自分の代わりに他人に決断を下してもらっては、自由意志の恵みを賢明に活用しているなどと感じることはできません。

決断を下すのはだれか

私の知人に、ある会社のかかなり高い地位に就いている人物がいました。会社へ行くときには、毎日書類かばんを持って出かけていました。ある日、奥さんがこう尋ねました。「どうして毎日その書類かばんを持って出勤するの。」

彼はこう答えました。「代表取締役副社長というのは、会社ではとても重要な役職なんだよ。だから、その扱う書類も同じように大切だということだよ。わかるかい。」

「それはわかるわ。でも、1日に何回くらいそのかばんを開けて、書類を見るの。」

「実際は、めったに開かないね。」

「書類かばんを持っているだけで、重要人物の気分になれるんなら、中に何も入れずに持って行った方が楽じゃないの。」

彼がその言葉についてしばらく考えていると、奥さん



がもう一言付け加えました。

「でも、偉い人だと思われたいというだけでかばんを持っていっても、あなたが会社を出る時間には、見てくれる人といったら守衛さんしかいないんじゃないの。」

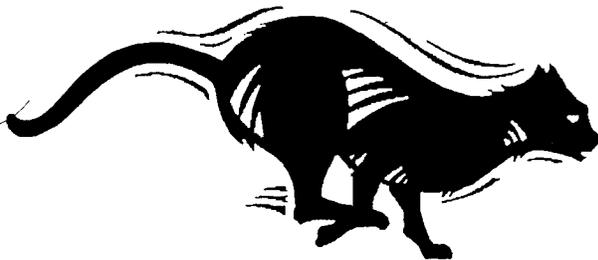
私たちは慣習の奴隷になることがよくあります。慣習の命じるままに行動しているのです。しかし、大多数の人がしているからといって、必ずしも正しいというわけではありません。私たちが昇栄できるかどうかを決める大切な要素は、行動の動機となるもの、つまりいずれ行動へと導くことになる自分の内なる思いについて、はっきりと自覚しているかどうかなのです。

私たちは、行動を起こすときと同様に、何かを考えたときも自由意志を使っています。デビッド・O・マッケイ大管長は、それを次のように表現しています。「私たち一人一人は自分自身の行く末を作り出しているのです。神の導きを受けることなく自分自身を作り上げようとする人は、実に不幸な人間だと言わざるを得ません。そのような人は、真の成長とは心の内に神の導きを受けて起こるものであって、外部から世の影響を受けて起こるものではないということを認識していないのです。」（「インストラクター」1964年1月号、p.1）

もし私たちが何かを考えたときに、自由意志を有効に活用しなかったならば、目標を定めるとか、欲望を抑えるといった精神の訓練はおろそかになります。また、自分の達成目標を心の中にはっきりと描いていなければ、私たちは行動の指針を見失ってしまいます。そして、他人の考え方や目標に左右されるようになってしまいます。

時間について

言い古された言葉を、その言葉の本当の意味についてじゅうぶんに考えずに、たびたび使っている人がい



ひとりの人間でしかない

自由意志という権利をじゅうぶんに行使しなかったときに、正当化のためによく使われる表現がほかにもあります。（普通

ます。しかし、そうした言葉で自分の行動が決まってしまう場合も多いのです。

たとえば、「光陰矢のごとし」という言葉がありますが、実際には時間は一定の割合で動いています。あるいは、「時間を節約する」とよく言いますが、実際には、時間は節約することも、借りることもできないのです。なんとかして「失った時間を取り戻せたら」と願う人も実にたくさんいます。しかし、時間は過ぎてしまえば、決して取り戻せないのです。

こういった時間に関する表現は、よく使われます。実際、私たちがそうした表現の深い意味をよく考えることなく、たびたび口にしています。

時間ほど貴重なものは、そう多くはありません。私たちが時間を賢明に管理できなければ、ほかに管理できるものなど何もないかもしれません。スペンサー・W・キンボール大管長は、次のように言っています。「浪費を正当化することはできない。特に、限られた試みの生涯の時間を浪費することはなおさらである。」（「赦しの奇跡」p.98）

ですから、不満を言っても、あるいは「時間がない」と言う人の言葉に賛成しても、時間の問題は何も解決しません。時間を賢明に使うことこそ、唯一の解決策なのです。

みずからの選択により決断するという務めを果たすには、時間をよく管理できるよう自己訓練をすることがきわめて重要です。私たちがもし自分の時間を賢明に使っていなければ、それは自分の自由意志を賢明に行使していないことになるからです。

は、いかにも「だめだ」「仕方がない」といった気持ちを込めて使われます)それは、「反対勢力が強いし、自分はひとりの人間でしかないのだから」という言葉です。

どうして、反対勢力が強いと行動が起こしにくくなるのでしょうか。反対勢力が強いからといって、行動を起こさないことが正当化されるわけではありません。むしろ、そんな状況にあるときこそ、私たちは行動を起こさなければならないのです。

リーハイは、ヤコブに次のように語っています。「それは、すべての物事には必ずその反対のものがなければならぬからである。……もしも物事にその反対のものがなければ、正義も不正も聖潔も憐むべき様も善も悪も生ずることができぬ。」(IIニーフアイ2:11)

試練も、反対勢力も、あるいはまた自分にとって不利と思われるような状態も、この試しの世の生涯を通じて、ずっと存在するものです。反対のものが存在するという原則から、私たちは決して逃れられないのです。だからといって、私たち人間がこのような条件の下に置かれていることを、何か困難な状況に直面したときに積極的な行動を起こさないことの言い訳にはなりません。

世の中には、人間だからという理由で、自分の弱さを正当化できると考えている人たちがいます。そのように考えるのは、「神は、私たちをこの地上に送られた時、私たちが必ずサタンの誘惑に屈伏し、墮落するだろうと予想しておられた」と考えるのと同じことです。

しかし、それは誤りです。聖典はこう教えています。「人は努めて善き業に従い、多くの事をその自由意志によりて為し、多くの正しき事を為し遂げよ。

そは人自らの中に自由の意志ありて己れの事を自ら為す者なればなり。従って人善を為さば決してその報いを失わざらん。」(教義と聖約58:27-28)

この聖句を読むと、私たちが毎日の生活の中でさまざまな課題に直面するにつれて、どのような態度をはぐくんでいくべきかがはっきりとわかります。それは、熱意、積極性、そして善良な心をもって課題に取り組む態度です。救い主のこのみ言葉や、その周囲の聖句には、「努

めて善き業に従い」「自由意志」「人自らの中に自由の意志あり」「善を為せ」など大切な言葉がちりばめられています。そして一つ一つの言葉に大切な意味が込められているだけでなく、これらの聖句全体として、私たちに積極的に才能や自由意志を用いるように教えているのです。

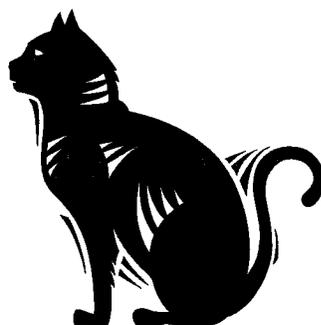
また、これらの聖句の中で救い主は、義務感から行なうのではなく、みずからの望みに従って喜んで奉仕をするべきであると教えています。救い主のみこころに従って生活する喜びを味わうためには、救い主を喜ばせたいという真心からの望みを抱く必要があります。そのような望みを抱くと、ほかでは決して得ることのできない、心の安らぎと満足感とがもたらされるのです。

主の領域で生活する

私たちはときに日常の仕事から離れて、自分の生活の中に自由意志が与えられていることの偉大な祝福について、深く考えてみる必要があります。ジョージ・アルバート・スミス長老はこのように述べています。

「主の領域とルシフェルの領域とを分けるはっきりとした境界線が存在する。もし、私たちが主の領域の中で生活していれば、ルシフェルはそこまでやって来て、影響を及ぼすことはできない。しかし、私たちがひとたびその境界線を越えて、ルシフェルの領域に入ってしまったなら、私たちはルシフェルに支配されてしまうのである。主の戒めを守ることにより、私たちは主の領域の中で安全に暮らすことができる。しかし、主の教えに従わなければ、私たちは自分の意志で誘惑の領域に入り込み、そこに絶えず存在する滅びを身に招いてしまうのである。この事実を知っている私たちは、いついかなるときも主の領域で生活するよう熱心に努めるべきである。」(「インブループメント・エラ」1935年5月号, p. 278)

私たちが日々決断を下そうとするときに、主の領域に立つことができるよう、心から願っています。□



地球の資源を大切に使う

神はアダムとイヴに「地に満ちよ、地を従わせよ。また……すべての生き物とを治めよ」（創世1：28）と命じ、大切な責任を与えられました。私たちはアダムとイヴから、天父が創造された地球の資源を管理し保護するという責任を代々受け継いでいるのです。

地を「従わせ」「治めよ」という主の指示には、この世界の土地、鉱物、空気、水、植物、そして動物を大切に扱わなくてはならないという意味も込められています。地を「満たす」というのは、私たちが大地や大気から取ったものを元に戻し、これからもそれらの祝福にあずかれるようにするということでもあるのです。

私たちに託されたものを賢く管理する

「然り、すべてこれら季節によりて地より生ずるものは、皆人の為人の用いんために造られ、眼を楽しませ、また等しく心を悦ばせんためなり。」（教義と聖約59：18）私たちが地球の資源を賢く大切に管理するならば、喜びを味わい、またほかの人々とその喜びをともにすることができます。

ある夫婦は古びた家を買ひ、何時間もかけて草取りをして庭をきれいに掃除しました。通りがかりの人は、よく手入れされた庭や美しい花を見てすがすがしい気持ちになりました。

ある若い監督とその家族は、庭の木になった果物を近所の老人たちに配り



ILLUSTRATED BY RON PETERSON

ました。この両親と子供たちは人々と、豊かに実った果物だけでなく、友情をも分かち合ったのです。

●あなたの住んでいる所をもっと明るく楽しくするには、どうしたらよいでしょうか。

地を満たすために役立つことをする

「地と海と木とをそこなつてはならない。」（黙示7：3）現代の人々は単位面積当たりの収穫量を増やす方法については昔の人々よりよく知っていますが、排出するごみの量や化石燃料の消費量、樹木の伐採量はますます増え、かつてないほど空気や水を汚染しています。しかし、資源を保護し補充するために私たちにできることがあります。

フィリピンの姉妹たちは、生ごみで作った肥料や鶏のふんを野菜畑にまいています。資源を大切にするために、廃棄物を利用し、家族の食物になる野

菜を育てる肥料にしているのです。

日本や台湾の人々は、排水溝に沿った土地や、家や工場の周りの土地を有効に利用して米や野菜を栽培しています。

アンデス地方では、木々が伐採され乾燥した台地の村落に住む人々が、各家庭で毎年1本、生長の早いユーカリの木を植えています。10年もたつと、1本の木から料理用や燃料用のまきを1年分採れるようになります。そのほか世界各地で人々は、後世の人々の資源を守るため、材木用の木々を伐採した後に再び植樹し、森林を保護しています。

姉妹たちも家庭内で資源の再利用や保護に努めることができます。水を節約し、車に乗らずに歩くことで石油から生成されるガソリンの消費を節約し、大気汚染を軽減することができます。

数年前、5人の子供を持つある母親が自分も何かできることをしようと決心しました。そこで、ペーパータオルや紙コップの代わりにふきんやガラスコップを買いました。また家族全員で新聞紙、アルミ缶や瓶類、プラスチック容器などをリサイクルする地域活動に参加するようになりました。絶滅寸前の動植物のことや、そうした生物の生存を助ける方法についても勉強しました。

●地球の資源を守るために、私たちはどのようなことができるでしょうか。

□

ジョージ・アルバート・スミス

生ける愛の模範

アーサー・R・バセット



たいていの人は、自分を真心から愛してくれ、しかもその愛を有意義な方法で伝えるすべを心得ている人には逆らいにくいものです。

教会の8代目の大管長であったジョージ・アルバート・スミス大管長は、人々に純粋な愛と関心を抱いている人で、そのことは教会内外を問わずよく知られていました。一例として挙げるならば、イギリスの小説家であるビバリー・ニコルズは、合衆国を旅行中に立ち寄ったユタ州でのことをこう書いています。「私がこれまでに、正直で高潔で神を畏れる人に出会ったとするなら、スミス大管長こそまさにその人である。」

もうひとり教会員でない人がスミス大管長について、彼の葬儀の席でこう語っています。「彼はあつい信仰を備えた、偽りのない人物であり、彼の教会においてのみならず、どの集まりにあっても精神面での指導者でした。だれでもただ彼のそばにいただけで彼の持つ崇高な精神を感じる事ができました。」

このような崇高さは、生涯にわたっ

て主に仕えることにより培われたものであり、堅固な末日聖徒であった先祖から受け継いだ教えを基とするものです。彼の父、ジョン・ヘンリー・スミスはジョセフ・F・スミス大管長の時代の十二使徒であり副管長でもありました。祖父のジョージ・A・スミスもブリガム・ヤング大管長の下で十二使徒、そして副管長として仕えました。母方の祖父ローリン・ファーは開拓者としてユタ州オグデン市を築く助けをし、初代市長を務めました。

ジョージ・アルバート・スミスはまた、ブリガム・ヤング大管長のひざの上に乗せてもらい、偉大な教訓を学びました。彼がまだ5歳の時、母から黒いベルベットのスーツを着せてもらい、ブリガム・ヤング大管長に会いに行きました。この時彼は、オグデン行きの汽車の切符を買うための援助を懇願する手紙を携えていました。彼の父親がイギリスで伝道中だったため、母親は助けを必要としていたのです。

ジョージは2区画を歩いてヤング大管長の事務所に着きました。当時の教会本部は壁に取り囲まれていました。

中に通じる大きな木の門を押し開けると、ジョン・スミスという大柄な護衛がいました。彼はジョージの顔をまじまじと見ながら、「何の用だね」と聞いてきました。ジョージがおびえながら「ヤング大管長に会いたいんです」と答えると、その男性は「ヤング大管長はお前さんなんかには会ってる暇はないよ」とどなるように言いました。スミス大管長によれば、今にも気を失いそうだったということですが、その時、建物の扉が開いてヤング大管長が出て来ました。そしてジョンに「どうしたのですか」と尋ねました。スミス大管長はこの時のことを次のように語っています。

「『このお子さんがヤング大管長との

ブリガム・ヤング大管長は幼いジョージ・アルバートを抱き上げてひざに乗せ、想像できるかぎりこれ以上のやさしさはないと思えるほどの態度でこう語った。「君はヤング大管長に何をしてほしいのかな。」



面会を希望していらっしゃるのです。』ジョンは冗談のつもりでこう答えると、大声で笑いました。しかしヤング大管長はこの上ない威厳をもって『ジョン、彼を通してあげなさい』と言われたのです。

護衛の男性は、ほかにどうすることもできず私を門の中に入れてくれ、ヤング大管長が立っている玄関口まで連れて行ってくれました。……

ヤング大管長は私の手を取って彼の部屋に招き入れ、いすに座ると私を抱き上げてひざに乗せ、腕を回してくれました。そして、想像できるかぎりこれ以上のやさしさはないと思えるほどの態度で、私にこう尋ねてくれたのです。『君はヤング大管長に何をしてほしいのかな。』

考えてもみてください。彼は、偉大な教会の大管長であり、ユタ準州の知事でもあり、なすべきことを山ほど抱えていました。それにもかかわらず、小さな男の子だった私にまるで隣接の州の知事が訪ねてきたかのように威厳とやさしさとをもって接してくださいましたのです。」

ジョージはこの礼儀の模範をいつまでも忘れず、相手の地位に関係なく人々の気持ちに敏感であろうと努めました。

その後、長い年月の中で彼は多くの人々と出会うことになります。彼は20

歳の時、「シオンの協同商業商会」の外交販売員として働いていました。腕馬車に乗ってユタ州全土を回り、さまざまな状況にあるあらゆる人々と会いました。ハーモニカやギターを弾いて皆を楽しませたり、体を鍛えるために使っていたインディアンクラブ(腕を鍛えるためのこん棒の一種)やバーベルの腕前を披露したりもしました。また、持ち前のユーモアのセンスによって多くの家の扉と人の心を開きました。

こうして働いて得たお金によって、ユタ州プロボのブリガム・ヤング・アカデミー(後のブリガム・ヤング大学。1875年開校)とソルトレークシティーのデゼレト大学(後のユタ大学)で教育を受けることができました。彼は専任の召しを2度受けました。初めは、若い男性・若い女性相互発達協会(YMMIA)のためにユタ南部居留地で若い人々とともに働きました。2度目の召しは1892年5月にルーシー・エミリー・ウッドラフと結婚した1週間後に与えられました。新妻も彼と一緒に合衆国南部諸州伝道部に赴任し、ふたりはともに伝道本部で働きました。

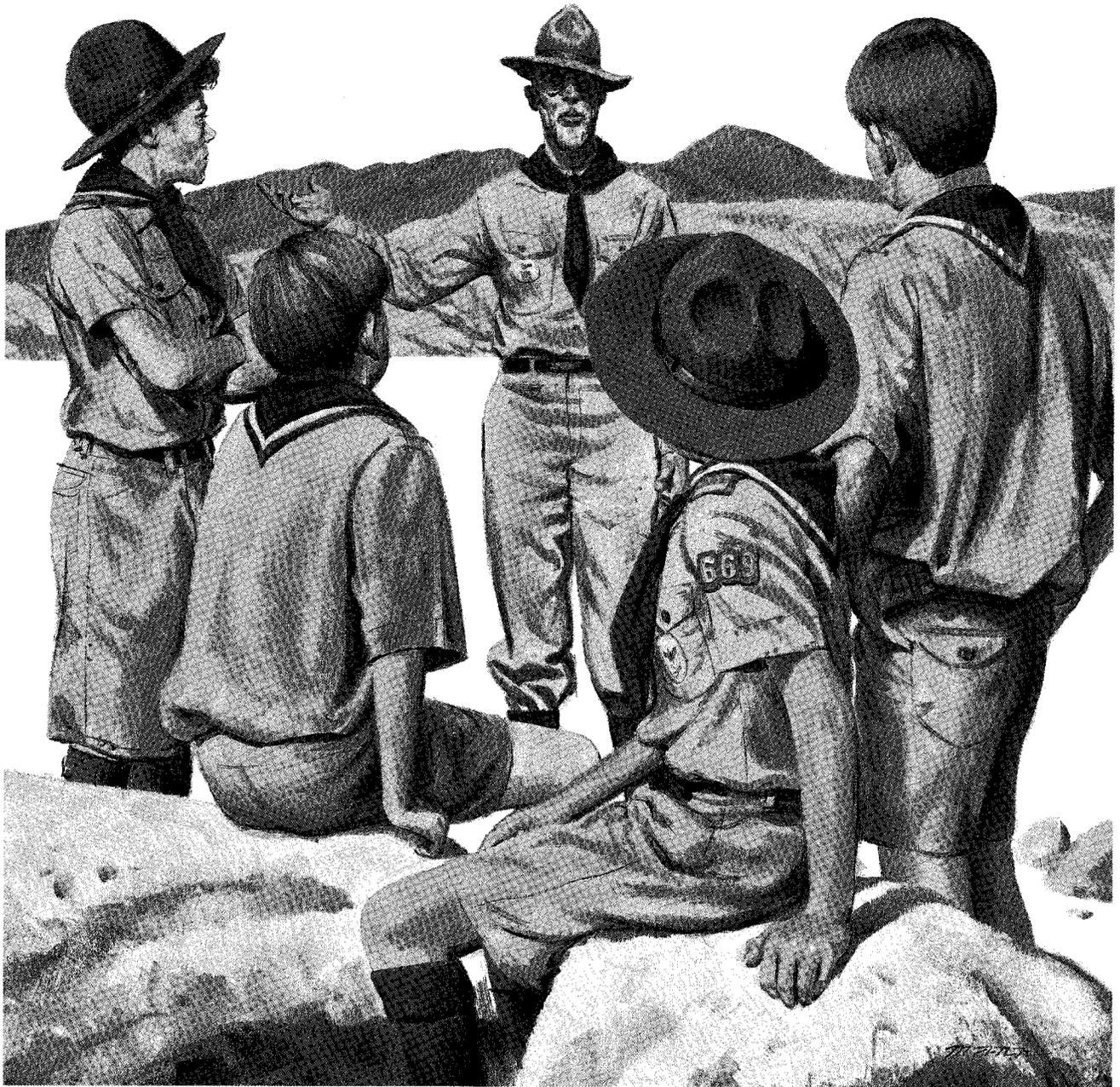
当時、合衆国南部ではモルモンへの迫害はなお激しく続いていました。ある時スミス長老はほかの宣教師とともにいた丸太小屋を暴徒に包囲されたことがありました。宣教師たちが床にはいつくばる上を銃弾が一齐に打ち込ま

れました。しかし、このような数々の経験に遭いながらも、スミス長老の胸には苦々しい思いはみじんもなく、「神のすべての子供たちに福音を分かち合う」ために一生懸命働こうという決意だけが熱く燃えていたのです。

伝道を終えた後、若いふたりはソルトレークシティーに居を据え、エミリー、エディス、ジョージ・アルバートJr.の3人の子供たちを育てました。

共和党のために行なった活動が認められ、ジョージ・アルバート・スミスは新たに州として承認されたユタ州で、政府公職に専任で携わることになりました。このほかに彼は、サンズ・オブ・アメリカン・レボリューション協会、ボーイスカウト・アメリカ連盟、全米農業会議など教会外でも活躍しました。

いずれの場合にも、彼の働きは組織にあって傑出していました。サンズ・オブ・アメリカン・レボリューション協会では副会長を務めました。スカウト活動では、シルバービーバー章に加え、アメリカの最高の章であるシルバーバッファロー章も授与され、ボーイスカウト・アメリカ連盟全国委員会でも働きました。また国際灌漑農場会議の議長も務めました。彼の人徳は彼の生涯のどの働きに対しても称賛されましたが、それはほかの人々の幸福を心から願う彼の熱意によるところが大き



かったからでしょう。

1903年、ジョージは家族とともに人生の大きな転機を迎えることとなります。当時33歳だった彼は使徒として召され、父とともに十二使徒定員会の一員として働くことになったのです。

ジョージ・アルバート・スミス長老はこの新しい召しに驚きながらも、自分の祝福師の祝福に書かれていたことを思い出しました。こう述べています。「12歳の時に祝福師のゼビディー・コウトリン兄弟から受けた祝福には、私がいつか使徒になると記されていた。」

使徒となった彼は、これまでの自分

の人生で目指してきた目標を書き出し、さらに主の僕^{しもべ}としていかに生きるべきかについての信条をつづりました。彼が「人生の信条」と呼ぶその中には、「友なき人の友となり、貧しい人のために働くことに喜びを見いだそう」という決意が記されています。

また、次のような思いも書き表わされています。「人類の贖^{あがな}い主が、私たちを進歩させ、この世でも^{きた}来る世でも幸福になるための唯一の計画を世に与えられたことを知るとき、私はこの真理を広めることは義務であるのみならず恵まれた特権であると感じる。」

スミス長老は、スカウト活動やキャンプを楽しんだ。スカウト活動への彼の働きは全国的な評価を受けていた。

彼は、使徒としての責任を果たしながら真理を広めていきました。1919年から1921年にはヨーロッパ伝道部長としても働きましたが、その間もずっと中央 YMMIA 管理会の一員として働き、ヨーロッパから帰国後は中央 YMMIA 会長となりました。

スミス長老は使徒として各地を旅し、

ヨーロッパや南太平洋の諸国を訪問しました。そして、行く先々で教会に対する好感情を高めていきました。1921年10月の総大会で彼はこのように話しています。「私は兄弟姉妹に深い愛を抱いている。また、教会員ではない御父の子供に対しても同様の気持ちである。御父が私に肉体の力と精神力を与えてくださるので、私はみずからの生活を整え、接するすべての人々の精神を高めるような者になりたい。」

新しく使徒として召されたスミス長老は、戦禍によって荒廃したヨーロッパを目にしました。さらに、十二使徒定員会会長となって再びヨーロッパが戦争に突入していくさまをも目にするようになりました。その戦争が終結したのはヒーバー・J・グラント大管長が亡くなる6日前でした。こうしてスミス長老は1945年5月21日、教会の大管長として召されました。

予言者の外套(列王下2：8-14参照)を身にまとい、間もなく、スミス大管長は教会による大規模な救援活動の管理のためにエズラ・タフト・ベンソン長老をヨーロッパに派遣しました。

1947年10月の総大会でスミス大管長は、ワシントンD.C.でハリー・トルーマン合衆国大統領と会った時のことについて話しました。

「私が訪問すると彼は愛想よく迎えてくれた。私は以前にも彼に会ったこ

とがあった。私は言った。『大統領、もし末日聖徒に食糧や衣類、寝具をヨーロッパへ送る用意があるとしたら、あなたがどのように取り計ってくださいるかお伺いしたいと思ひまして、参ったのですが。』

彼はにっこりとして私の方へ目を向け、こう言った。『何のためにお送りになるのですか。ヨーロッパの貨幣価値は高くありませんよ。』

私は言った。『お金が欲しいわけはありません。』彼は私を見てこう尋ねた。『では、それをヨーロッパの人々に進呈しようとおっしゃるのですか。』

私は言った。『そのとおりです。私たちはそれを彼らに進呈したいのです。彼らは私たちの兄弟姉妹であり、苦難の中で生活しています。神は私たちに余ほどのものを祝福してくださったので、もし政府の協力が得られれば喜んでそれを送りたいと思っているのです。』

その協力は、貨物列車や船舶の手配という形で即座に得られました。教会員に救援物資が行きわたると、スミス大管長は何トンもの小麦を飢餓にあえぐギリシャの教会員でない人々に送るよう指示しました。自分自身も少年時代に貧困を味わった経験があったので、そのような苦しみを受けている人々を助けるためにできるかぎりのことを行

なったのでした。苦しむ人がいるのを知りながら放っておくことは彼にはできませんでした。決して無関心ではいられなかったのです。

こうして彼は「貧しい人のために働くことに喜びを見いだそう」という自分の信条を実行したのです。

「病人や悩む人を見舞い、彼らの心に癒される信仰を呼び起こす」ことも彼の信条のひとつでした。ソルトレークシティーの病院をはじめ、多くの病院で患者を見舞うスミス大管長の姿がよく見受けられました。彼自身も病に苦しみました。使徒として働き始めて以来、何年間にもわたって召しをじゅうぶんに果たせないほどの重病を患ったこともありました。それから10年後、彼は総大会でこのように話しています。

「私はここ何年か死の陰の谷を歩んできた。向こう岸にとても近い所をさまよっていたので、もし天父の特別な祝福がなかったなら、きっと生き長らえることはできなかつただろう。……しかし、向こう岸に近づけば近づくほど、この福音が真実であるという確信はより深くなった。」

彼は病を通して学んだ教訓を決して忘れることはありませんでした。これらの教訓によって、彼はさらに思いやりの深い人となり、救い主のように「肉体をもつ者として……虚弱の度に



応じてその民を救う方法を知る」ことができたのです。(アルマ7:12)

結局、スミス大管長は紅斑性狼瘡と診断され、その慢性的な疲労に苦しみました。このような病の中で彼は、再び世界が政治的な東西の緊張に巻き込まれ、朝鮮戦争が勃発するのを生きて目の当たりにすることになります。そして1949年10月の総大会で「世は病んでいる」という警告の声を上げました。

また、この大会で彼はこう語りました。「神の裁きが下る日に至るまで、人を法律で縛ることはできる。しかし、法律がありさえすれば、世の中が義人

であふれるというわけではない。暗やみにいる人はみずからの罪を悔い改め、生活を正し、天父のみたまを享受することのできる正しい方法で生活する必要がある。」

混乱する世界情勢の中にありながらも、スミス大管長は楽観的に、そして予言者の視点に立って偉大な伝道活動が始まろうとしていることを予測していました。1945年10月の総大会で彼はこう語っています。

「私たちは、まだほとんど手をつけていない南米諸国に福音を伝えなければなりません。また、アフリカやアジア

スミス大管長はハリー・S・トルーマン合衆国大統領を訪れ、ヨーロッパで戦禍に苦しむ「私たちの兄弟姉妹」の元に救援物資を搬送するための協力を要請した。

にも伝道しなければならない。私は、まだ私たちが入国することを許されていない世界の国々へも足を踏み入れて、人々に語りかけるつもりである。私は、イエス・キリストの福音を伝えるのに、ロシアほど実り多い地はないと考えて

いる。」

それから1年後の大会ではこう述べています。

「短波放送がさらに発達して、この説教壇やほかの地から、主の僕たちの語る言葉がはるかかなたの孤立した人々の元にも届く日が間もなく来るであろう。そのようなさまざまな方法を通して、主イエス・キリストの福音、救いを得させる神の力は日の光栄の王国に備えて、世界の隅々にまで伝えられるのである。ここにお集まりのかたの中でも、おおぜいの人々がその日を目にするであろう。」

「私は人に自分の理想を強要せず、愛をもって正しい行動へ導こう」と語ったこの人物は、1951年4月、世を去りました。享年82歳でした。彼が管理の職にあった間、100万人を数え、さらに増加を続ける教会員のために教会の建築プログラムが推し進められ、宣教師の数は3,000人に達し、アイダホフォールズ神殿が献堂されました。

ジョージ・アルバート・スミス大管長の葬儀の席で、彼の副管長を務めたJ・ルーベン・クラーク長老はこう語りました。「彼はまさに愛の人と呼ばれるにふさわしい人でした。」□

ジョージ・アルバート・スミス年表 1870—1951

年	年齢	出来事
1870		4月4日 ユタ州ソルトレークシティで生まれる。
1883	13	「シオンの協同商業商会」の作業着工場で働く。
1891	21	ユタ州南部で YMMIA の召しを果たす。
1892	22	ルーシー・エミリー・ウッドラフと結婚する。
1892—94	22—24	合衆国南部諸州で伝道する。
1898	28	マッキンレー大統領から合衆国議会収入役、およびユタ州特殊支出事務官に指名される。
1903	33	十二使徒定員会の一員となる。
1904	34	信条を書面にしたためる。
1909—12	39—42	病気のため十二使徒定員会での活動が困難となる。
1919—21	49—51	ヨーロッパ伝道部長として働く。
1922	52	サンズ・オブ・アメリカン・レボリューション協会の副会長に選ばれる。
1931	61	ボーイスカウトアメリカ連盟全国委員会の一員に選ばれる。
1939	69	ヨーロッパで戦争が勃発する。
1941	71	日本軍がハワイの真珠湾を攻撃する。
1943	73	十二使徒定員会会長となる。
1945	74	5月8日 ヨーロッパでの戦争が終結する。 5月14日 大管長となる。 8月14日 アジア極東地域での戦争が終結する。
1947	77	ユタ開拓百年祭が催される。
1951	82	4月4日 ユタ州ソルトレークシティで死去。

参考文献

1. 「ジョージ・アルバート・スミス」「予言者の生涯に見られる逸話」レオン・R・ハートショーン編
2. メリオ・J・ピューズィー「ジョージ・アルバート・スミス」「教会の大管長」レナード・J・アrinton編
3. 「ジョージ・アルバート・スミス」「モルモニズム百科事典」

逆境は
あなたを
強くする





世界の 子供たちの 芸術



今年初め、ソルトレークシティーにある教会歴史美術館の主催で、第1回国際児童絵画展が開かれました。この絵画展には、世界じゅうの2,600人以上の年少の末日聖徒の芸術家たちから、家族をテーマにした水彩画、スケッチ、コラージュなどの作品が寄せられました。

今回の絵画展を企画した同美術館の教育担当者ジェニファー・ルンド姉妹はこう述べています。「5歳から11歳までの子供たちが描いてくれたどの作品からも、家族の大切さが伝わってきます。子供たちの作品には、神への信仰、家族への愛、洞察力、創造力がよく表われています。」

2,600点を超える応募作品の中から300点を選ばれ、4カ月間にわたって展示されました。これらの作品のうちいくつかを、本誌裏表紙の見返しページも含めここにご紹介します。

私の家族
小林美登利 みどり 5歳
日本、群馬県



村の夏 ユーラ・ティヤコフ 8歳 ロシア, サクトペテルブルグ



鳥にえさをあげているところ
マーシャ・マカロバ 8歳
ロシア,
サクトペテルブルグ



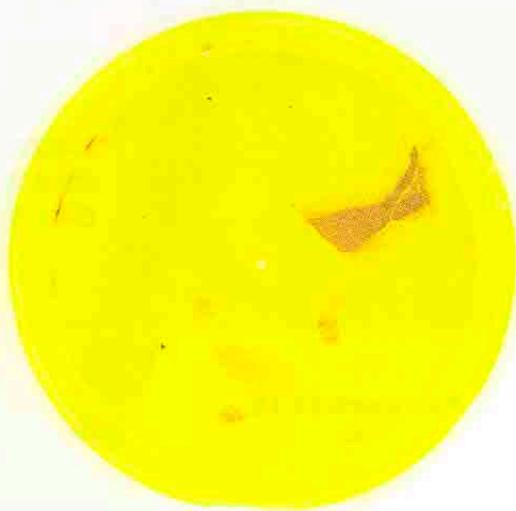
家族の祈り
アナ・ポーラ・マルケス
11歳
アルゼンチン, チュブット



神殿
ダビッド・ファラベラ・
サンチェス 8歳
コスタリカ



蛍
平林野虎武 5歳
日本, 群馬県





みんなで市場へ(上)
イーバン・ラミレス・
ゴディーネス 8歳
グアテマラ,
グアテマラシティ

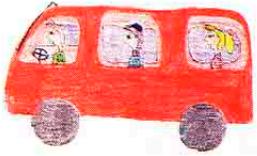
いなかで(左下)
マリエラ・モンテロソー・G
9歳 コスタリカ

お誕生会(中央下)
中部麻由 6歳
日本, 東京

神殿訪問(右下)
マンウェーラ・カプーアノ
11歳 スイス







家族で行ったピクニック

(左)

レベッカ・デルガード・
カムパス 11歳
コスタリカ

家族で過ごした休暇(上)

カーラ・バレラ 11歳
コスタリカ

自画像(下)

石王^{せい}聖太 10歳
日本, 東京

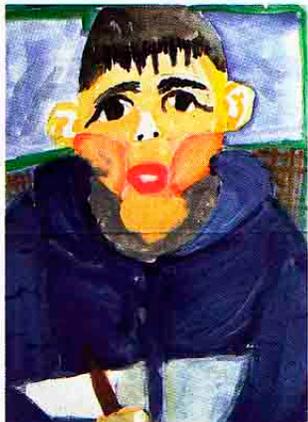


きれいに掃除した私の部屋(上)

サーラ・マリー・
ウェットシュタイン 7歳
スイス, ジュネーブ

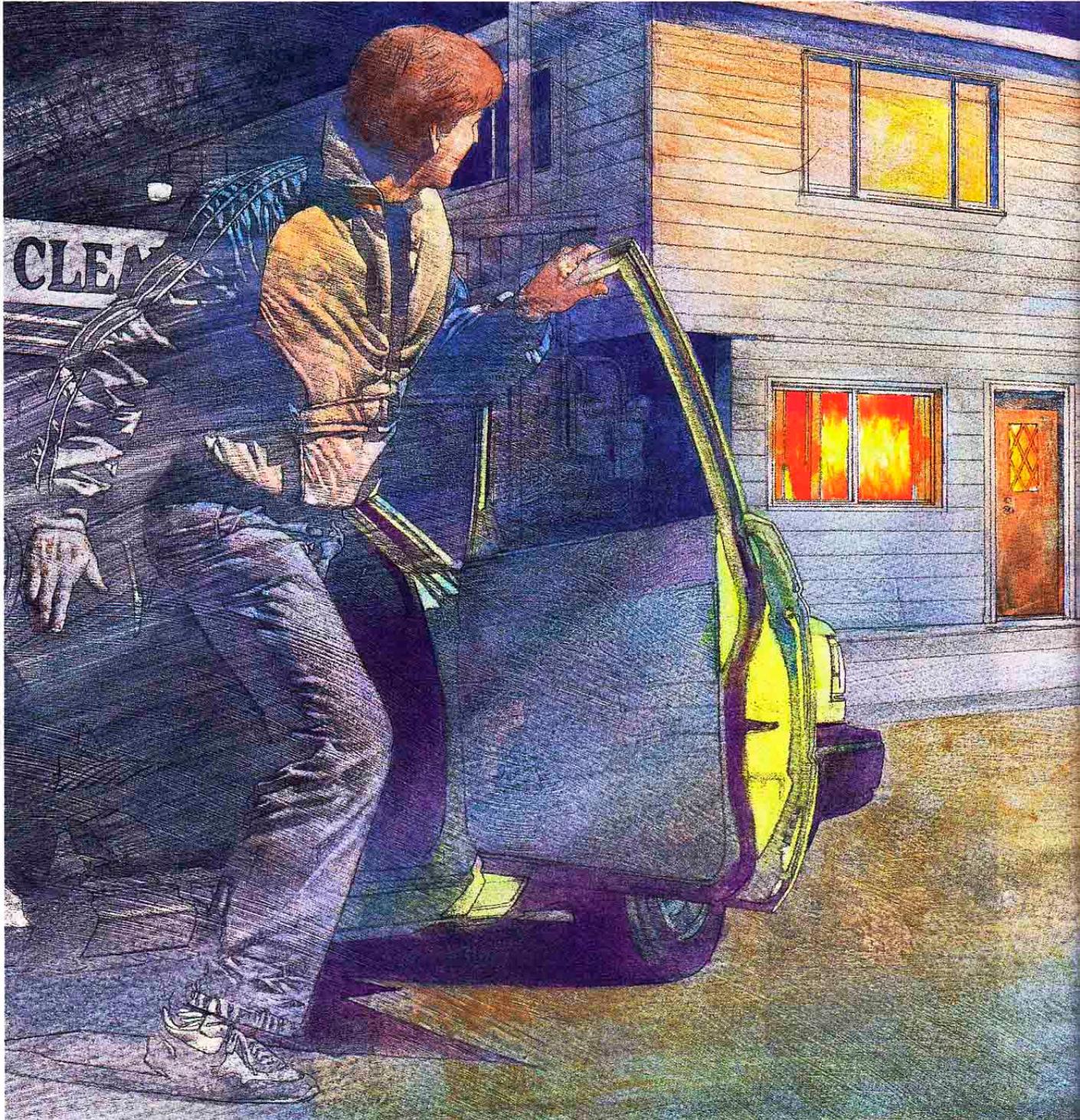
お手伝い(下)

アスチ・デウィ・
スリー 11歳
インドネシア,
ウエストソロ



家族の歴史

名前不明 9歳
フランス, サントロノ



導きを受けて入り込んだ道

匿名

それはオハイオの冬によくありがちな、雪と雨のどちらが降ってもおかしくないような気温の夜でした。私たち3人は、車を走らせながら同時に道路標識をチェックしようとしたのですが、何の手がかりも得られませんでした。教会員ではありませんが、私の友人で18歳になるジム・ボウエンとマーク・オーカマンが、氷に覆われた道路をゆっくりと進む車の中から、道路標識に書かれた「通り」の名前を大声で読み上げました。

「ぼくが知っているのは、クリスがダイバート通りに住んでいて、そのダイバート通りというのが今ぼくらの走っているこの通りからちょっと外れたどこかにあるってことだけなんだよ」とジムが弁解めいた口調で言いました。「それにしても、本当にこんなに遠いの？」とマークが尋ねました。

その時私たちがいた所はスプリングフィールドの南端で、3人もこの辺りの地理にはあまり詳しくありませんでした。あてどもなく車を運転する役目を押しつけられた私は、ダイバート通りを探し当てるまで、あるいは、自分たちが今いるこの通りの行き止まりにたどり着くまで、とにかく運転し続けるしかないという覚悟を決めていました。

私たちは、一区画一区画ゆっくり車を走らせ、通り過ぎる一つ一つの道路標識を読み取ろうとしました。そして、もうあきらめて引き返そうとしたその時です。とうとう見つかったのです。私たちは、「ダイバート！」と一斉に声を上げて喜びました。

道路が凍っていたのとタイヤがすり減っていたのとで、私の運転する車はダイバート通りを過ぎて20メートルほ

ど離れた駐車場に入り込んでやっと止まりました。その駐車場でUターンして来て、それまでずっと探し回っていたダイバート通りと垂直になるように車を止めました。さて、次の問題は、ダイバート通りを左右どちらの方向に進むかということでした。マークと私は左右どちらに曲がればよいかで意見が分かれました。そんな時、ジムの一声で、私たちは眼前にある一軒の家に目をやりました。

その家はこの辺りのほとんどの住宅と同じく、木造の2階建てでした。正面は小さな商店になっていて、その後ろはアパートになっているようでした。

商店は私たちがたった今出て来た通りに面していて、私たちの車はこの家の側面に向かって停車する形になっていました。

その家の側面の窓から、炎の影のようなものが部屋の壁に揺らめいているのが見えたのです。窓のブラインドが下りていたので、その炎が暖炉から出ているものなのか、それともガスレンジから出ているものなのかわかりませんでした。しかしすぐにこの炎がガスレンジのものにしては大きすぎ、暖炉のものにしては床から離れすぎていることに気づきました。

私はエンジンをかけたまま、ギアをパーキングの位置に入れて、車を飛び出すと、マークのすぐ後ろを走りました。窓に近づくにつれて、その炎が思っていた以上に激しく燃えているのがわかりました。私たちは、塀を飛び越え、裏口の方へ走りました。力いっぱいドアをたたきましたが、何の返事もありませんでした。ドアには鍵がかかっています。私はジムにだれか手伝っ

てくれる人を探して来てくれるよう大声で叫びました。そして自分は走って、建物の正面に回りました。

私は入り口のドアを足でけり開け、中にあったカウンターを跳び越えました。店と裏のアパートは小さな部屋を介してつながっていました。

店と軒続きのこのアパートの居間には若い女性がいて、金切り声を上げながら小さなマットで火をたたき消そうとしていました。詰め物がたっぶり入っていたと思われる大型のソファは、すっかり炎に包まれていました。壁紙にはすでに火が移ってめらめらと燃えていました。炎は恐ろしい速さで壁を走り、その女性の真上にある天井まで燃え広がりました。

私はまず腰をかがめたまま、向きを変えると部屋から脱出しました。火は激しく燃え、煙はどんどん部屋を覆ってきました。

私はその女性にも外へ逃げ出すよう大声で叫びましたが、結局、彼女の腕をわしづかみにして、部屋から引きずり出さなければなりません。私はこの女性に、「家の中にはまだだれかいますか」と尋ねましたが、答えを聞くまでもなく2階から泣き叫ぶ声が聞こえてきました。

「子供たちが」と言いながら彼女は泣きじゃくっています。

「何人ですか」と私は尋ねました。

彼女は、2階にふたりの子供がいると答えました。そして、炎を上げているソファのすぐ近くにある、階段に続く戸口を指差しました。その間ほんの数秒しかたっていないのですが、火は壁という壁を覆い尽くし、天井という天井に燃え広がってしまいました。

戸口の方に目をやった私は、たとえそこうまくたどり着くことができたとしても、もう一度同じ道を通って帰ってくるのはまず無理だろうと思いました。

私は天父に思いをはせました。できることはただひとつしかないように思われました。神に全幅の信頼を置いて、炎に取り巻かれたその戸口に飛び込んで行ったのです。あらんかぎりの勢いで狭い階段を駆け上る時は、顔が焼けるようでした。

子供たちは、階段を上り切った所に立ちすくんでいました。5歳の女の子と2歳の男の子でした。ふたりは母親を求めて、泣き叫んでいました。私は子供をひとりずつ腕に抱えと、くると向きを変えて、今来た階段を駆け下りようと思いました。ところが見ると、階段を4分の3くらい上がった所にある母親が立っているではありませんか。彼女はマークが止めるのを振り切ってそこまでやって来ていたのです。

その時です、大きなごう音が聞こえたのは。火はもう階段の吹き抜けの真ん中辺りまで迫ってきていました。

階段に立っていたこの一瞬の間、私はかつてないほど心を込めて、一心不乱に祈りました。その時気がついたのは、私の命だけでなく、母親とふたりの子供の命までが、まさに私の取る行動一つ一つにかかっている、ということでした。声には出しませんでした。が、「私の思いではなく、みこころがなるようにしてください」と祈ったのを覚えていています。

その時突然、マークがまだ1階にいることを思い出しました。私はこれ以上は不可能と思えるような大声でマー

クの名前を呼び始めました。後でマークが話してくれたのですが、私の聞いた大きなごう音というのは居間の天井が崩れ落ちる音であり、めらめらと燃える巨大な天井板が床の上に落下したのだそうです。母親が戸口の方へ飛び出して行った直後のことでした。マークは1階にとどまり、なんとか火を食い止めようと家じゅうのドアを全部閉めていました。「窓から外に飛び出さず」と私は叫びましたが、マークの耳にはまったく届いていませんでした。

煙が充満するまでにあまり時間がないと見て取った私は、階段を駆け上り、窓を探しました。

2階に駆け上がると、私は窓のひとつもなさそうな真っ暗な部屋に飛び込んでしまいました。足の裏が熱くなってきていました。煙の充満が、秒刻みで堪え難い状態になってきているのわかりました。しかし母親が導いてくれて、私は踊り場へと進み、屋根の上に出られる窓の所までたどり着きました。

まず母親が窓から外に出ました。私は、子供たちをしっかりと抱き抱えたまま、彼女の後に続けました。屋根の端までたどり着いた時、家のどの窓からももうもうと煙が吹き出しているのが見えました。マークがすぐ下に見えたので、子供を落とすから受け取ってくれ、と叫びました。

私は体を回転させて、男の子を家から1メートルほど離れた所に立っているマークに放り投げました。マークは文句の言いようのないくらいうまく受け止めてくれました。

煙が深く立ち込めてきて、もう地面が見えなくなっていました。どこからか声が聞こえてきて、その声に促さ

れるまま女の子を屋根から放り投げました。後でわかったことですが、ある男性がこの火事を見つけて、車を止め、マークのいる所まで走って来て、間一髪のところまで女の子を受け止めるのに力を貸してくれたそうです。

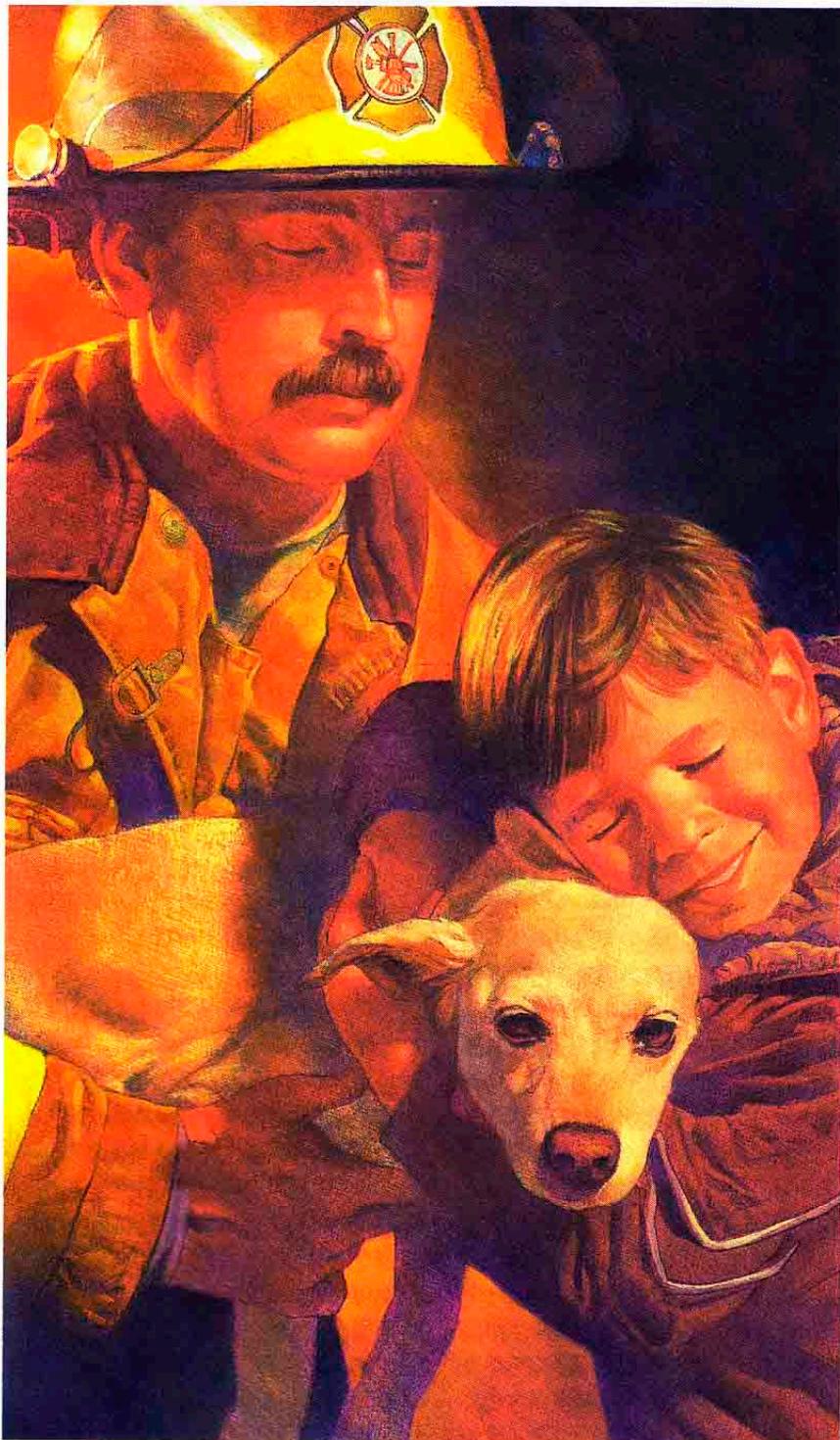
母親はなおもすすり泣いたり、興奮のあまり声を上げて泣いたりしていました。マークは男の子を下に置くと、自分の体を投げ出し、彼女が屋根から飛び降りる時の衝撃を和らげました。私は足から先に飛び降りて、けがもなく着地することができました。

無事に着地した私は、このアパートの別の世帯の部屋の方へ走って行きましたが、そこでジムと私はドアをたたきましたが、だれも出て来ませんでした。数秒後、私たちは窓ガラスを割ってドアの鍵を開けました。各部屋をくまなくチェックすると、そこにはだれも住んでいないことがわかりました。

もう一度建物の外に向かって走りながら、私が考えたのは、煙を吸い込んだり、ショックを受けたり、寒さにさらされたときにどう対処するかといったボーイスカウトの訓練を何年も受けたおかげで、自分がどれほど多くのものを得ていたかということでした。母親と子供たちは、まだエンジンのかかっている暖かい車内に誘導されました。男の子が、「ぼくのワンワンはどこ？」と尋ねてきました。私は子犬などどこにも見かけませんでしたが、子犬は大丈夫だよと言い聞かせました。もうこの時には消防車や救急車が家の前に到着していました。私はマークとジムに病院で会おうと告げました。

3人とも治療を受けると、帰っても大丈夫ですと言われました。

火事の後、その家で残っているものは
焼け焦げた骨組みだけだった。
しかし幸いなことに、男の子の子犬は
無事だった。



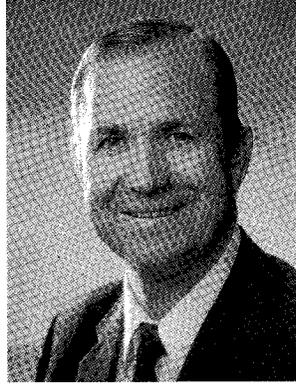
火事の現場に戻ると、9台の消防車が止まっていた。火はすでに収まっていた。あの建物で残っているものは焼け焦げた骨組みだけでした。依然として窓から煙の吹き出している家を見た時には、背筋がぞっとしました。3人でその場にたたずんで、いましがた起こった火災の跡を厳粛な思いで見ていると、消防員のひとりが小さな動物のぬいぐるみのようなものを抱えて出て来ました。それはぬいぐるみではなく、あの男の子が言っていた子犬でした。この子犬は1階の物置きに隠れていたのですが、そこが一種の安全地帯のようになっていたため、あの2時間続いた火災の中、かすり傷ひとつ負わずに生き残れたのでした。

私の心は安堵感と感謝の念でいっぱいになりました。そして単なる偶然でこの家に導かれたのではなく、天の力により靈感を受けたために方向を間違えたのだと気づきました。もし主の助けがなかったならば、おそらく何人かの命が失われていただろうと思いました。このような経験をするまでの私は、自分の信仰は弱いと思っていました。しかしこの経験を通して、もし自分に信仰がなかったなら死への恐怖でパニックに陥っていただろうと思うようになりました。福音の教えと、福音が与えてくれる死に対する理解のゆえに、正しい判断を下し、なすべきことを行なうことができたのです。そしてあの時、私の命は天父のみ手のうちにあったのだとわかりました。私は死より救われたこと、また、靈感により曲がる方向を誤り、その結果自分の信仰がとも強められたことに感謝しています。

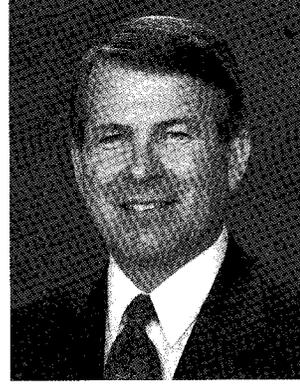
□



ホラーシオ・A・
テノリオ長老



リン・A・ミケルセン長老



ジョン・B・
ディクソン長老

南アメリカ南部地域で活躍する 末日聖徒

南アメリカでは数十万人の末日聖徒の生活に教会が影響を与えています。チリ、アルゼンチン、ウルグアイ、パラグアイの教会の発展状況を知るため、本誌記者が南アメリカ南部地域会長会長のリン・A・ミケルセン長老、また副会長のホラーシオ・A・テノリオ長老とジョン・B・ディクソン長老にお話を伺いました。

質問—南アメリカ南部地域では教会員はどのような問題に直面しているとお考えですか。

答え—どの地域の会員たちとも同じ問題、つまり福音に従い、キリストのみもとに行くという問題です。ただ、この地域の会員たちには問題の克服に役立つ優れた資質が備わっているように思います。

質問—どのような点で特別な強みを持っているのでしょうか。

答え—まず、大変あつい信仰があります。予言者のすべての言葉に耳を傾け、予言者を尊敬し、いつも彼に対する愛を表わします。そして、聖典や教会の機関誌を研究します。ですから会員たちの福音の知識や学習意欲には並々ならぬものがあります。私たちは再三、そのような素朴であつて、強固な信仰を目にしています。

質問—南アメリカ南部地域の会員数はどのくらいでしょうか。

答え—現在約61万人強ですが、急

速に増えつつあります。4つの国に、現在、18の伝道部と100以上のステーク部が組織されていて、チリとウルグアイでは総人口の中に占める末日聖徒の割合は合衆国よりも高い状態にあります。

質問—伝道活動が成功している原因は何でしょうか。

答え—いくつかの要因がありますが、ひとつは専任宣教師とその指導者たちの献身的な働きにあります。彼らは口を開くことに非常に熱心で(教義と聖約33:10参照)、どこにいても福音を宣べ伝えています。たとえば、この地域で伝道中のふたりの宣教師が、ある日7件のレッスンを教えるという目標を持っていました。その日の晩、自転車で帰宅する途中——その日はまだ6件のレッスンしか終えていませんでした——たまたまひとりの青年が自転車で彼らのわきを通り過ぎていきました。ふたりの宣教師は顔を見合わせると、やおらその青年に近づき、彼の

両側に自転車を走らせて、教会を紹介したのです。そしてこう言いました。「これはきわめて神聖な話ですから、自転車を止めてください。」宣教師は止まって、ジョセフ・スミスの話をし、回復について証しました。この青年は今、伝道に出る準備をしています。

この青年のように、南アメリカ南部地域の人々は福音を聞く準備が整っていて、喜んで証に耳を傾け、自分の感じた確信に従って行動します。そしてみずからも自分で得たものを人々に分かち合おうとしています。教会は人々の尊敬を集めているので、教会の話をするのはさほどむずかしくはないんです。

この地域で教会が実際にどのような状態にあるのかを知ることは、世界のほかの地域に住む会員たちにとっても、きわめて重要です。この地域の国々はいわゆる発展途上国ではありません。ここでも、ほかのいろいろな場所で用いられている伝道教材やアプローチを使うことができます。私たちはいくつかの成功を収めていますが、たとえば、広報のメディアプログラムなどがそうです。教会はあらゆる職種の人々の関心を集めているんです。教会員の中には、学識経験のある人々やビジネス界

で高い地位にある人々がおおぜいいます。

質問——各界で活躍する人々が教会の発展にどのような影響を与えているか伺いたいのですが。

答え——末日聖徒の言動は、社会のあらゆる階層の人々に影響を及ぼしています。

2, 3カ月前のことですが、ウルグアイのモンテビデオでこの国の大統領がセミナーとインスティテュートに学ぶ480人の末日聖徒の学生に話をしました。地区代表のひとりで、国会議員でもあるルイス・アルベルト・フェリーソ兄弟が大統領にこう話したのです。「大統領はよくウルグアイの将来について話をされますが、実際にその将来を見ていただきたいと思います。」こうして、フェリーソ兄弟は大統領とこのすばらしい若人との出会いをおぜん立てしてくれました。

教会員の中には「高潔さ」の模範で知られている人々もいます。チリのバルパライソに住む地区代表のひとり、ハイメ・ゴンザレス兄弟は彼のクリーニングサービス業の成功の大半は「誠実さ」に対する評判のおかげであると言っています。彼はその経営方針のために、軍関係の数カ所の施設や企業の大口業者になったのです。

末日聖徒は高い標準を持っているために働き手として重宝がられています。教会員のある若い医師は、病院で患者たちから名指して診療を依頼されます。彼が「たばこを吸わない医師」であることを患者が皆知っているからなんです。

教会の中には地域社会や国家への貢献、家族への献身などで広く知られている会員や指導者がたくさんいます。たとえばパラグアイにある伝道部の副伝道部長のひとり、周囲の尊敬を集める軍の高官です。(本誌「パラグアイの開拓者たち」p.10参照)また、別の地域のステーキ部長とその奥さんはともに医師です。6人の子供がいますが、ふたりとも立派に親の務めを果たしています。ところがふたりを知る人々の間では奥さんがさらに有名です。彼女は目下、自分の医師としての職業よりも家庭を築くことに力を注いでいるからです。

会員たちの献身的な働きのために、教会に社会の関心の集まることがよくあります。プエノスアイレスで開かれたユースカンファレンスでは、若人が奉仕活動に携わる機会がありました。彼らが集会を開いた公園の管理者は、かなり大変な仕事を提供したにもかかわらず、若人たちが1日でそれを処理してしまったことに驚き、とても喜びました。アルゼンチンのコルドバでは深刻な洪水があった際、最初に援助を申し出た団体の中にこの教会の数カ所のステーキ部が交じていました。彼らは私たちからの指示を受けてそうしたのではなく、みずから申し出たのです。

質問——福音はさまざまな方法で人を変えることができるわけですが、皆さんの目から見て、人々の生活で一番変わったのはどのような点でしょうか。

答え——最も著しい変化を見せたのは、一人一人が何を行なうにも福音を

通して新しい霊的な視点を得た、ということではないでしょうか。何よりも福音によって家庭が強固になりました。会員たちは教会の指導者の勧告に従い、できることはすべて行なって家庭を強めています。神殿も会員たちにとって神聖な場所になっています。そこで永遠の結び固めを受けるために、彼らは家族と一緒に神殿に参入することを願っています。

質問——教会の発展に伴って指導者たちは特殊な問題に直面していますか。

答え——一番大きな問題のひとつは会員の活動への参加を促進すること、つまり奉仕の機会をもっと人々に提供することなのです。すべての会員は教会で割り当てを受け、召しを受ける権利がある、ということを強調して、私たちはこの問題に対処しています。教義と聖約84章の109節と110節はこの点を明らかにしています。すなわち、どの人も教会で働く必要があり、教会自体も、組織を完全なものとするには、すべての会員の働きを必要としているのです。

私たちは指導者に人々を召すよう奨励しているだけではありません。必要であれば地元により小規模の支部を組織して、活動に参加することから得られる祝福を人々が享受できるように、いわば教会を人々の元へ持って行くようにも、勤めているんです。会員の奉仕は教会には不可欠の要素ですし、奉仕こそイエス・キリストが約束された命を得るための、会員たちが進むべき道ですから。□

若人の広場

モルモン経の 活用法



モルモン経は、あらゆる問題を解決する万能薬のような役割を果たします。次に挙げるのは、必要なとき、どこを読めばよいかを記したリストです。

アリゾナ州トゥーソンに住むダグラス・ホルト兄弟は、聖典の活用法について若い女性たちに教えてほしいと頼まれました。彼は18歳の娘マリアンに、聖典がどのように役立っているかを尋ねました。そして、家庭の夕べの時間を使って、彼女とともにモルモン経を用いて次のようなリストを作りました。

こんなときは……

- 罪や過ちを犯してしまい悲しいとき II ニーファイ 4：17-35
- この世になぜ多くの相反するものがあるのか知りたいとき II ニーファイ 2 章
- 信仰が試されるとき アルマ 32：21-43；モーサヤ 24：13-14, 21
- 神に見放されたと感じるとき アルマ 36：27；モーサヤ 4：9；7：33
- 自分の力不足を感じる時 アルマ 37：6-7
- 祈る気になれないとき II ニーファイ 32：8-9
- 意気消沈したとき アルマ 26：27
- 自分の弱点にくじけそうになったとき イテル 12：27-29
- 霊を鼓舞する必要があるとき モーサヤ 4：27

もし、あなたが……

- 導きがほしいなら II ニーファイ 32：3
- 誤った方向に誘惑を受けたら II ニーファイ 28：21-23
- 主の答えがなかなか得られず、これ以上忍耐できないと感じたら II ニーファイ 28：30
- 模範となることに疲れてしまったら アルマ 17：11
- 罪を犯しても後で悔い改めればよいと感じたら アルマ 34：32-34
- この世的な考えに心を奪われそうになったら II ニーファイ 28：7-11
- 救しが必要なら イノス 1 章
- 情欲を抑えたいなら モーサヤ 3：19
- 何について祈ればよいかわからなければ アルマ 34：17-28；37：36-37；38：14

こんなときどうすればよいか知りたいとき……

- バプテスマと聖霊たまものの賜を受けた後 II ニーファイ 31：18-20
- やみに包まれたとき モーサヤ 16：9

- 争う心が生じたとき IIIニーファイ 11:29-30; モーサヤ18:21
- 死を恐れる気持ちがあるとき アルマ40章
- キリストのみもとへ来るためには オムナイ1:26; モロナイ10:32-33

どこに記されているか……

- 「ニーファイの詩篇」と呼ばれている箇所 IIニーファイ4:17-35
- アルマの改宗 アルマ36章
- キリストの死はなぜ必要だったのか アルマ34:8-16
- キリストが幼な子をみもとに引き寄せられた時の記録 IIIニーファイ17:21-24
- リーハイの夢 Iニーファイ8章
- ベンジャミン王の説教 モーサヤ3-5章
- モロナイの約束 モロナイ10:3-5
- 聖餐^{せいさん}の祝福の祈り モロナイ4, 5章
- 山上の垂訓 IIIニーファイ12:1-12

どうすればよいか知りたいとき……

- 新しく生まれ変わるために モーサヤ5章; 27:24-25
- 信仰を持つために アルマ32章
- 善と悪を見分けるために モロナイ7:5-28
- ほかの人の失敗を教訓とするために モルモン9:31
- サタンの攻撃から身を守るために ヒラマン5:12
- 教会から離れてしまった人との接し方 アルマ24:30

なぜ私たちは、そうすべきかを知りたいとき……

- みたまの声に聞き従う モルモン経ヤコブ4:13
- キリストのことを喜ぶ アルマ26:11-16
- 困難を堪え忍ぶ モルモン経ヤコブ6章□

才能を伸ばす

「青年の幽霊」それに「12歳のころ」は、とてもおもしろい物語ですが、決してベストセラーになったわけではありません。実は、この著者は現在、学校の文学誌にもうすぐ掲載予定の作品がひとつあるだけなのです。

しかし、作家になることを熱望している14歳のキャロリン・ジェスは、そんなことにめげず、多くの出版社に原稿を送り続けています。

「それは、自分の才能を伸ばすのにとても役立っています。それに、作家

を目指すほかの人々への励ましにもなるでしょう」と、北アイランド・ベルファストステーク部ハリウッドロードワード部の会員であるキャロリンは言います。彼女はまた、著作の仕事に伴って詩を書いたり、イラストを描いたりもします。

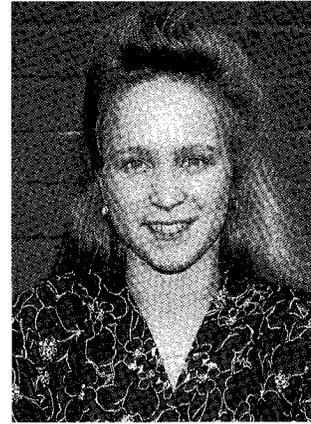
彼女が一番気に入っている物語は、何人かの末日聖徒が登場する作品で、ベルファストとニューヨークを舞台にしたものです。□





全員出席

早朝セミナーで毎日、出席率100パーセントが続く所は、めったにありません。しかし、スペインのマドリード伝道部アルカラ・デ・エナレス支部は例外です。セミナー教師を兼任しているステーキ部長の授業を受けるため、たいてい12人の生徒全員が、週に5日、出席しているのです。ここにクラス全員の写真があります。前に写っているのはセミナークラス会長のロベルト・エータ兄弟とクラス副会長のイサベル・キレス姉妹です。□



優れた演奏

イギリスのバーミンガムステーキ部ソリフルワード部のキャロリン・リックフォード姉妹は、ステーキ部大会やセミナーの卒業式で見事な演奏を披露してくれます。このたび彼女は、名門の芸術学校「コベントリセンター」への入学が決まり、とても誇りに思っています。キャロリンの得意とする楽器はフルートとピアノです。「キャロリン、おめでとう。」□

フィンランドの若人

フィンランドの若人は、どのように毎日を楽しんでいるのでしょうか。12歳のラウラ・アラコスキー姉妹は、クッキー作り、スキー、読書、縫い物、それに音楽を演奏するのが大好きです。

ラウラは家で、ケーキやクッキーを焼いたり、ジンジャークッキーを用いて精巧な家を作ったりしています。また、棒針やかぎ針で編み物もします。自分用の型紙を使って服を縫うこともあります。クロスカントリースキー、サイクリング、アイススケートを楽しんだりもします。

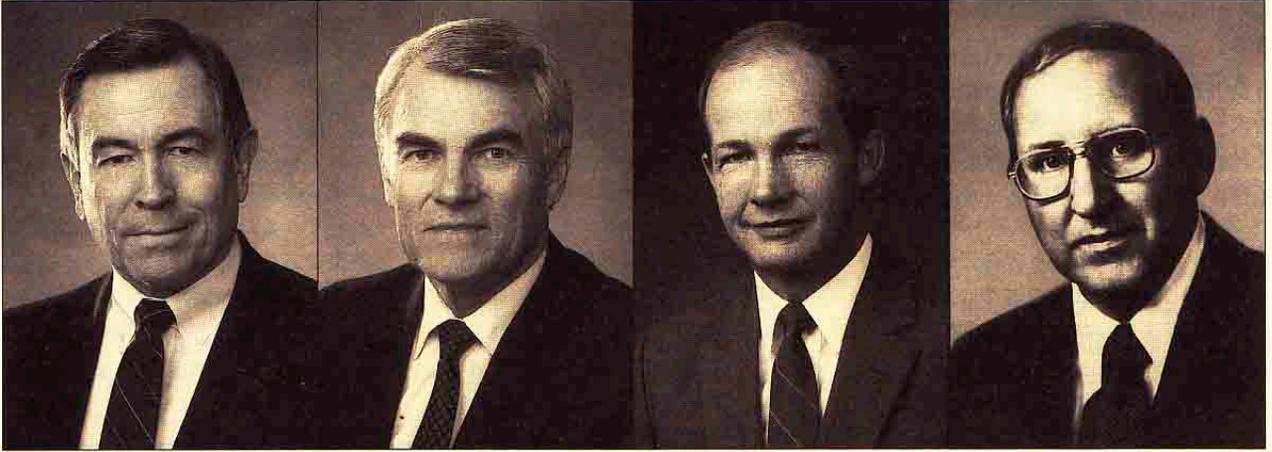
音楽面では、ピアノを弾くのが大好きで、11歳の時には初等協会の伴奏者に召されました。今では、ワード部の聖餐会の伴奏者を務めています。周りには末日聖徒の子供はあまりいません。しかし、ラウラはどこにいてもだれとでもすぐ友達になれます。□



新たな召しを受けた教会幹部

七十人会長会会員

中央若い男性第二副会長



W・ユージン・ハンセン長老 ジョー・J・クリステンセン長老 モンティ・J・ブラフ長老 ボーン・J・フェザーストン長老

アジア北地域会長会



第一副会長
韓仁相長老

会長
メルル・J・ベイトマン長老

第二副会長
サム・K・島袋長老

大管長会は、W・ユージン・ハンセン長老、ジョー・J・クリステンセン長老、モンティ・J・ブラフ長老を七十人定員会会長会に任命した。今回、七十人会長会を解任されたディーン・L・ラーセン長老、ジェームズ・M・パラモア長老、J・リチャード・クラーク長老の3人は、それぞれ世界各地の地域会長会で働く任命を受けた。七十人会長会に新しく召され

た会員は、教会のさまざまな管理部門でエグゼクティブ・ディレクターを兼務することになる。

七十人第一定員会のボーン・J・フェザーストン長老は、これまでフィリピン・マイクロネシア地域会長会会長を務めてきたが、このたび中央若い男性第二副会長に召された。

大管長会は、東京に拠点を置くアジア北地域会長会の会長として、七十人

のメルル・J・ベイトマン長老を任命した。ベイトマン長老は、七十人定員会会長会に召されたハンセン長老の後を引き継ぐ。

ベイトマン長老はこれまでユタ州北部地域会長会で副会長を務めていた。

韓仁相長老とサム・K・島袋長老は、引き続きそれぞれ第一副会長および第二副会長を務める。(「チャーチニュース」1993年6月12日付)

新たに奉獻された東欧4カ国

4人の十二使徒評議員会会員が、伝道のみ業を推し進めるために東欧の4カ国を奉獻した。これにより「鍵を回して扉の錠を開けた」ことになる。

大管長会の指示の下に、ジェームズ・E・ファウスト長老がラトビアを、ダリン・H・オークス長老がアルバニアを、ラッセル・M・ネルソン長老がベラルーシを、そしてM・ラッセル・バラード長老がリトアニアをそれぞれ奉獻した。これらの国々は1990年から1991年まで、共産主義の支配下に置かれていた。

各奉獻式の概要は以下のとおりである。

ラトビアのリガ——3月17日、ファウスト長老が元ソビエト連邦の共和国を奉獻した。ファウスト長老は奉獻の祈りの中で次のように述べた。「この勇敢な国民の長い歴史に畏敬の念を抱きます。何世紀にもわたり弾圧され、征服され続けたにもかかわらず、この国の民は信仰を持ち続けてきました。」

ファウスト長老は、ラトビアの地に平和と自由が引き続き宿るように祈った。また国の指導者が正しく、誠実で、公平であり、敬虔であるようお願い求めた。「この国の民が聴く耳と謙遜な心を持ち、主の王国で皆が再会できるよう祈ります。」

アルバニアのチラナ——オークス長老が東欧のバルカン半島にある小さな山国を奉獻した。4月23日、奉獻の祈りの中で、オークス長老はこの地とその指導者、そして国民の上に祝福もたらされるようお願い求めた。

また国民が「知恵と力に恵まれ、自由の光がこの地で栄えるように、そして飢える者に食が与えられ、苦しむ者に慰めが与えられるように」と祈った。奉獻式は首都が見渡せる丘で行なわれた。国立記念碑「英雄たちの記念碑」の近くであった。

またオークス長老はこのように付け

加えて祈った。「主よ、悪魔の機先を制し、この国の平和と自由、繁栄を妨げようとする一切の試みを打ち破ってください。」

ベラルーシのメンスク——5月11日、ネルソン長老はかつてベロルシアまたは白ロシアと呼ばれていたこの国を奉獻した。ネルソン長老は真理と幸福を探究し続けてきた人々に感謝の意を表し、キリストのみもとに来る「人々が多く刈り入れられるよう」祈り求めた。

ネルソン長老は祈りの中で、さらに次のように述べた。「この地にはイスラエルの種族が多くいます。選民がこの地に集合し、シオンのステーキ部で保護と力を得ることができますように。主の子らが戒めを学び従うときに、彼らがこの地にて栄えますように。」ネルソン長老はこの国を「平安の聖域、信仰の聖地、差別のない信仰の自由がある地」として祝福した。

リトアニアのピリニウス——街を見下ろすことができる小高い丘で、バラード長老が同国を奉獻した。奉獻の際に、バラード長老はその丘がリトアニアの発展において重要な歴史的意義を持つことに言及した。

5月20日の奉獻の祈りの中でバラード長老は、リトアニア人に平和と繁栄が訪れるようお願い求めた。バラード長老は祈りの中でこのように述べた。「天父よ、彼らがこの大きな転機を乗り越えられるよう助けてください。彼らは自由を得て、御子イエス・キリストの福音を述べ伝える教会の宣教師を、この地に迎えるという特権を手にすることができました。……この地の人々は善良であり、心の正しい人々が多くなります。……宣教師が彼らの心を動かすことができますように。そうすればみ業が推し進められるでしょう。」(「チャーチニュース」1993年6月12日付)



奉獻された4カ国

モンゴル人民共和国が奉獻される

先ごろ、十二使徒評議員会のニール・A・マックスウェル長老は福音を宣べ伝えるためにモンゴルの地を奉獻した。これにより、同国に新しい時代が訪れたと言えよう。

マックスウェル長老と、アジア地域会長会の一員である、七十人の戴^{タイフオック}國源長老は、4月15日、モンゴルのウランバートルに赴き、この地を奉獻した。ふたりはまた、同地で働く5組の夫婦宣教師や政府高官とも会った。

マックスウェル長老は奉獻の祈りの中で、モンゴルの国家と国民が独立を維持し、経済発展の道が開かれるよう主の祝福を願った。

奉獻後、夫婦宣教師のためのレセプションが開かれ、50人ほどの政府関係者も出席した。「政府のかたがたは、温かく歓迎し、感謝してくださいました。教会はこの国にあって、とても良

い関係を築いています」と、マックスウェル長老は述べている。

夫婦宣教師は1992年9月に、モンゴルに赴任した。(『モンゴルにおける宣教師』「聖徒の道」1993年1月号、p. 118参照)

国の高等教育の制度を、ロシア型の指令経済向けの制度から、西欧型の市場経済に適した制度へと移行しつつある過渡期のモンゴルにあって、これらの夫婦宣教師は、政府指導者や教育者たちを支援している。

「これは非常にむずかしい仕事です」と語るのは、アジア地域会長会の一員であり、七十人のジョン・K・カーマック長老である。「宣教師たちは、大学で教えることによって必要な援助をする傍ら、国の教育機関との協議を通じて専門的な知識や技術を供与しています。すべて無償です。」

「宣教師たちは、教育の分野で、政府高官から歓迎されています」と、七十人でアジア地域会長会会長のモンティ・J・ブラフ長老(注——現七十人会長会会員)は語っている。

宣教師が開く教会の集会には、現在20人ほどが出席している。今年2月には最初のバプテスマがあった。これまでふたりが改宗し、バプテスマを目前に控えている人々もいる。

伝道活動は許可されており、宣教師は時を惜しんで教えている。彼らの博愛的な奉仕は国中の関心と呼び、政府からもこの上ない配慮を受けている、とカーマック長老は述べている。「なんとかしてもっと宣教師を送ってこないか、と政府から要請されているほど彼らの評価は高まっています。」(「チャーチニュース」1993年6月19日付)

イタリアで教会が宗教法人として認可される

「イタリアで画期的な出来事が起きたと言えるでしょう。5月12日、イタリア政府が教会を正式な宗教法人として認可しました」と、七十人定員会会員でありヨーロッパ・地中海地域会長会会長のスペンサー・J・コンディー長老が述べた。

警察がイタリアの教会員の近所に住む人々や仕事仲間質問をした、とコ

ンディー長老は語った。「警察は彼らにモルモンとはどんな人々なのか聞いたのです。彼らが得た報告は例外なく肯定的なものでした。そしてそれが基となって正式に認可を受けることになったのです。この国の末日聖徒は自国に貢献しました。そしてすばらしい市民です。」

末日聖徒イエス・キリスト教会の宣

教師がイタリアに到着したのは、1850年が最初である。彼らの働きによりほぼ100人がバプテスマを受けた。その大半が合衆国に移住した。教会は1965年に入国を許可され、翌1966年に伝道部が再開された。(「チャーチニュース」1993年6月12日付)

ブルガリアの子供たちに希望をもたらすボランティア

ブルガリア、ソフィア発

目が見えること、耳が聞こえること。それは、これまでの2年間、バルカン半島の国々で、助けを必要と

する子供たちに手を差し伸べる救援活動に参加してきた末日聖徒が願ってきたことである。

教会救援事業課ディレクターのアイク・ファーガソン兄弟によると、ヨー

ロッパ地域会長会および教会救援事業課の指示の下で働く小児科医、眼科医、耳鼻科医をはじめとする人々は、ブルガリアに赴き、以前東の陣営に属していたこの国の子供たちの生活を向上させるために医師や看護婦に訓練を施してきたとのことである。

医療人員に加え、教会はブルガリアの特殊教育を向上させるために教育者も派遣してきた。また、同国のふたりの学校経営者を、ユタ州とアイダホ州

の教育訓練施設の視察に3週間の日程で招待した。

ファーガソン兄弟はこのように述べている。「過去2年間、かなりの数の医師たちが3つの異なる活動でボランティアとして働いてきました。彼らはたいがい1度にひとりずつ派遣され、それぞれ約2週間働きます。この1年に4人の眼科医を派遣しましたが、より高度な医療技術をブルガリアの眼科医たちに教えるために今後の1年間にも、あと4人送る予定です。がんの専門医や神経科医、リウマチや胃腸病の専門医も派遣しましたが、彼らは皆、小児科を担当するため同地に赴いたのです。」

ブルガリアの病院や医療施設で末日聖徒のボランティアが働けるのは、ソルトレークシティの教会本部や西ヨーロッパの教会管理本部の末日聖徒と、メリーランド州のベセズダにある国際眼科研究所などの民間組織とのチームワークの賜物である。

教会は前述の研究所の協力を得て、研究所の眼科医にボランティアとして2週間ブルガリアで働くように招請している。彼らはブルガリアの眼科医たちに、国際眼科財団に寄せられた基金で購入した医療機器の操作法を教授するのである。

国際眼科研究所のような機関と教会救援事業課の間の調整役を務めるのはエドワード・ビショップ兄弟である。彼は教会における国際福祉と救援事業の分野の責任者である。ソルトレークシティの教会本部職員としてヨーロッパ地域を担当しているビショップ兄弟は、5月にブルガリアを訪問した。

ビショップ兄弟はこのように述べて

いる。「西ヨーロッパの教会員たちはまったく惜しみなく援助活動に貢献しています。彼らも第二次世界大戦中に苦難を経験しているので、強い同情を感じているのではないのでしょうか。彼らの多くは何が最も必要かを身をもって知っているのです。彼らはこう言っていました。『私たちに援助させてください。』このようなわけで、ソルトレークシティから東ヨーロッパ向けの援助物資を送ることもできたかもしれませんが、必要な救援物資を購入する基金の大部分は西ヨーロッパで賄われました。つまり西ヨーロッパでは、現在ブルガリアで行なわれている救援活動のため、特別な努力が払われたのです。また教会は、ふたりの学校経営者をユタ州に招き、3週間の滞在中、教育に関する情報を提供し、見識の向上に寄与しました。」

ビショップ兄弟は、東ヨーロッパでの救援活動を行なっている機関がたくさんあることに触れ、次のように語っている。「私たちは既存の機関を通して働く場合もあります。そうすれば救援活動が重複するのを避けることができます。たとえば、衣類を送るときは、別の組織を通して物資を配送するようにしています。

時には直接やりとりすることもあります。末日聖徒の医師をブルガリアへ派遣した時のような場合です。医師たちは病院を巡回し、手術にも携わりました。」

このほかにも教会は、ブルガリアにおける救援事業の一環として、聴力検査機器を寄贈したり、眼鏡や教科書を学校や大学、公立図書館などへ、点字用タイプライターをふたつの盲学校へ、

マイクロフィルム読み取りのための機器を公文書保管所へ、衣類や毛布を孤児院と精神科の治療施設へ贈ったりしている。さらに、幾人かの教師が英語を教えるためにブルガリアに赴任している。

5月18日朝、十二使徒評議員会のM・ラッセル・バラード長老はソフィアにおける教会救援事業の状況を視察した。バラード長老には、七十人でありヨーロッパ地域会長会の副会長でもあるデニス・B・ノイエンスンバングー長老、ブルガリア・ソフィア伝道部のデール・J・ワーナー伝道部長、救援活動のために召された宣教師のリン・ネルソン長老が同行した。

バラード長老とその一行は厚生省と精神遅滞者の施設内のふたつの教室を訪問した。教会は、以前この学校にミシンと木工作業用器具を寄贈している。

またバラード長老とノイエンスンバングー長老は、教会が後援するユタ州とアイダホ州への視察旅行から帰ったばかりのふたりのブルガリアの学校経営者からの報告を受けた。彼らは、視察旅行で学んだ事柄のおかげで現在ブルガリアはカリキュラムと訓練において少なくとも5年分の進歩を遂げた、と報告している。

バラード長老はチャーチニュースの記者にこう語っている。「世界じゅうでますます多くのクリスチャンが奉仕活動に励んでいるおかげで、数多くの天父の子供たちが祝福を受けています。その祝福の中には、奉仕をする教会員自身が受ける祝福も含まれています。それは本当にすばらしいことです。主はご自身の教会がこのような救援活動に携わっていることをきっと喜んでおられることでしょう。」(「チャーチニュース」1993年6月5日付)

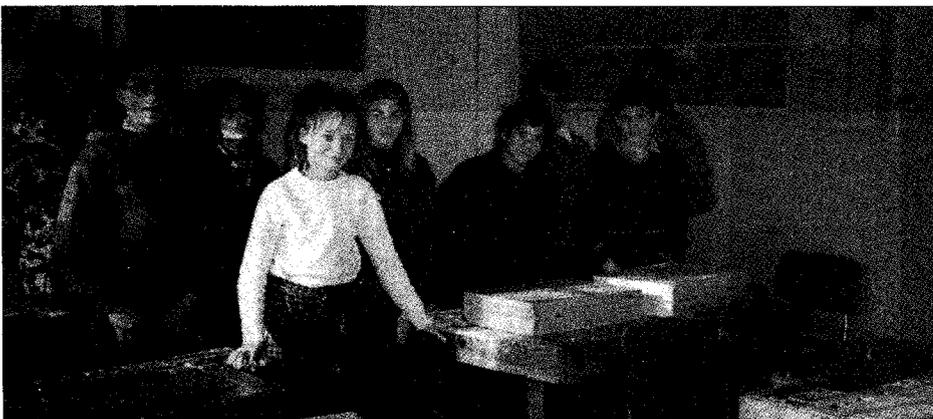


PHOTO COURTESY LDS CHURCH HUMANITARIAN SERVICES

教会は、ブルガリアにあるろう学校の生徒たちのために器具や書籍を寄贈した。



特別養護老人ホームの生活指導員として

——「初めて見た時から何か特別な気がしていた」——

東京南ステーク部千束ワード部 富岡 豊

こ何年か、日本の社会の急激な高齢化が伝えられている中で、特別養護老人ホームについて大きく取り上げられるようになりました。

14歳で改宗し、21歳で伝道に出た私は、高校時代から福祉関係の仕事がしなかったこともあり、伝道を終えて社会福祉の専門学校に入学しました。卒業後、東京都内にある特別養護老人ホームで働くようになって、7年目を迎えています。このホームには80人ほどの65歳以上の高齢者が生活しており、身体に障害があったり、または痴ほうの状態にあったりするため、何らかの介助を必要としています。そのような施設で、私は前半の3年を排泄や入浴などの介助を行なう直接介護職員、つまり寮母(寮父)として、後半は生活指導員として働いています。

生活指導員は高齢者の施設のみではなく、身体障害者や子供の施設など、さまざまな施設にある仕事です。老人ホームについて言うと、生活指導員は直接介護にも当たりますが、むしろホームの運営や維持管理などの側面や、利用者の金銭の預かり、住民税や老人ホームの使用料の申告、保険や年金の手続きなど、専門的な知識の必要な事務面を受け持ちます。さらに、利用者の入所時には区役所の職員とともに最初の面接を行ない、その後も必要に応じて行ないます。面接といっても、実際には利用者の話を聞くことに重点が置かれています。最後まで利用者の話をよく聞き、一体利用者が何を必要としているのかを理解するように努めます。そうしなければ、話を途中で遮って意図をじゅうぶんにくみ取れなかったり、本人が望んでもいない答えを出したりと、自分本位な面接になるからです。話を熱心に聞いてもらえれば、それだけで心配や問題が解決できる利用者も何人もいます。それに当たっては、伝道中にたくさんの求道者の

話を聞き、何が必要かを考えていた経験が役立っています。

私の職場では、指導員は毎月1回夜勤があり、その日は夕方4時半より朝の9時半まで、途中で仮眠を取るものの、オムツ交換、就寝時や起床時の着替えなどの介護をします。この間、利用者に何もなければよいのですが、熱を出したり、痴ほうのある人が徘徊をしたりとさまざまですので、何事もなく夜勤が終わるとほっとします。指導員にはいろいろな仕事があるにせよ、利用者と接することが基本であると、私は考えています。一日じゅう机で仕事をしなければならないときもありますが、利用者として接している時が、仕事としては一番楽しい時です。

利用者として接している中で、ひとりの末日聖徒として多くの事柄を学んでいます。5年前の夜勤の朝のことでした。自分の担当していた階では、30人からの人を起こさなければならなかったので忙しく働いていたのですが、ふとベランダのガラス戸に目が留まりました。そこでひとりの女性の利用者が何かをしていました。不思議に思った私は、気づかれぬようにそっと近づきました。彼女は腰が深く曲がり、背の高さも私の半分しかありません。その腰を伸ばすようにして太陽に顔を向け、手を強く合わせ、何かを熱心に祈っていました。何を祈っているのか、私はさらに近づき聞き取ろうとしました。「ホームのみんながきょうも1日健康でありますように。みんなが仲良くできますように。」その祈りは、私たちのする祈りの形とは違っているかもしれませんが、言葉だけとれば、とりたてて特別な祈りでもありません。しかし私にはとても神聖な祈りに感じられました。私はその場にはいけないと感じ、気づかれぬように自分の仕事に戻りました。愛する心を祈りに表わすことについて深く感じさせられた出

来事でした。

この仕事に就いて何十人という利用者に接してきましたが、多くの人が現世での生活を終えています。人の生死に日々かわる中で、何よりも私が福音の中から慰めを見いだしているのは、すべての人に復活があるということです。

2年前のことでした。90歳ぐらいの女性の利用者がおり、私が話しかけるといつも私の腕をつかみ、驚いたように「よおく、太っているね」と言いました。2日ぐらい休むと決まっていたのも、「顔が見えないからやめてしまったのかと心配したよ」と言いました。やがて彼女の状態が少しずつ悪くなり始めました。私は彼女のベッドのそばに行き「すぐ元気になりますよ」と声をかけましたが、本当は彼女の時間が残り少ないのを感じていました。彼女は少しの間外を見つめた後、私の顔を見て言いました。「あんたには、本当に世話になったね。初めて見た時から何か特別な気がしていた。」私は彼女に悟られないように涙をぬぐいました。

すべての人が復活すると証できますが、それ以上の強い望みを持っていません。極端に言えば復活しなければ困るとさえ思います。私にとって現世で忠実に過ごす理由のひとつは、この世を去った人たちに会うためです。忠実であれば、障害もなく、痴ほうもない彼らに再び会うことができるのです。

このホームで働く経験は私の「高価なる真珠」です。ほかの人のためには輝かないかもしれませんが、けれどもその一つ一つの経験が、私の人生の中で最高に光り輝いているのです。ひとりのクリスチャンとして、高齢者が快適に不安なく過ごせるように努力をしていきたいと考えています。またこの経験と知識を使って多くの人たちに奉仕ができればと思います。(とみおか・ゆたか ワード部日曜学校会長)

高崎ステーキ部桐生ワード部



きりゅう

桐生ワード部の紹介

——老若それぞれが一致して——

高崎ステーキ部桐生ワード部

浅野 敏重



豊かな自然に囲まれた桐生市の南に位置する桐生ワード部は、家庭的なワード部です。

広い駐車場と大きな建物に恵まれ、私たちが体育館と呼んでいるレクリエーションホールもあります。そこでは、バスケットボール、バレーボール、バドミントンなどのスポーツができます。また、舞台をセットすれば演劇なども行なうこともできます。宣教師も友達や求道者の人たちとともにスポーツを楽しんでいます。

毎月第2安息日には食事会を行ないます。扶助協会の姉妹たちの心のこもった食事は味も格別で、会員、求道者、宣教師と、一堂に会していただくのは、楽しく、なごやかな交わりのひとときとなっています。

桐生ワード部では、YAH(Young

at Heart Society「若い心の会」)で長年活躍している50歳以上の兄弟姉妹とは対照的に、若い人たちの活発化が課題となっていました。それが一昨年あたりからセミナーが活発になり、昨年は、目に見えて若い人々の活動が盛んになってきました。

若い男性、若い女性、独身成人の人たちが集まり、自分たちで何かできるものはないかと考えた末に、「赤毛のアン」の劇をワード部の人たちに見てもらおうという目標を立てました。監督会はその話を聞いた時、少し不安を覚えました。それまでと違った彼らの決意の深さを感じ、彼らの意志を尊重しました。彼らは本当に熱心に練習しました。今年1月16日、ワード部のレクリエーションホールで練習の成果を披露し、好評を博しました。

3月31日には、ステーキ部長会の発案で、ステーキ部センターである高崎の教会で上演しました。当日は、ステーキ部長会をはじめ、たくさんの会員の皆さんが見に来てくださり、ここでも好評を博しました。この劇を通して桐生ワード部の若い人たちの才能、努力、信仰、そして一致の精神を見ることができ、彼らの将来を楽しみにしています。

若い人たちが熱心に働くときに教会は明るくなり、さらに活気がでてきます。すばらしい桐生ワード部の会員の皆さんと主のみ業に働けることに心より感謝いたします。会員の皆さんとともに昇栄できるように頑張っていきたいと思います。(あさの・としげ 監督)



開業医として思うこと

——「あなたにとって試練と賜は時間の管理のうちにある」——

高崎ステーキ部桐生ワード部

鈴木 憲一

大学病院での研究生活から離れて、病院勤務となったある日のこと、宣教師の戸別訪問を妻が約束いたしました。勤務時間が一定しないことを理由に、当方のまったく勝手な時間に合わせて宣教師に来てもらい、福音を教えてもらうようになりました。当初2、3回のお話でごまかそうと思っていたにもかかわらず、妻と一緒にバプテスマを受け、15年が過ぎてしまいました。

福音を学び始めたころ、医師という仕事の性格上、「生と死」については日常茶飯事のように身近に感じていました。現実的に、特に「死」の問題は、「個体としての、生物としての器官、臓器の終焉」としては理解していたものの、「みたま、聖霊、死後の世界」など、半ば抽象的な言葉の理解には苦しみました。ヒトを顕微鏡レベルで学んできたことのうぬぼれであったかもしれせん。しかしどれほど医学を研究したとしても、人体の組織、臓器の相関がこれほどまでに精緻に作動している状態は、一学問体系から人間の理解できるところではなく、ヒトは神様の被造物であるという認識に至らざるをえませんでした。

また同時に、「人はどこから来たのか、何のために生きているのか、どこへ行くのか」という質問も、なまじ人体に対して知識がある者にとっては、大変理解に苦しむ問題でした。しかし、私たちが自分の子供を愛するように、神様も私たち一人一人の行く末を案ずる愛を持ってくださっていることを知った時、肉体は死んでも、人は粗末にされているわけではないという強い気持ちになりました。

改宗して2年を経たころ、ささやかではありますが、開業医として出発する転機を迎えました。未知の土地での開業は、期待したように患者さんの訪

れもなく、経済的にも不安の日々が続きました。不安感と焦燥感のためか、教会への足も引きずるようなこともありましたが、「道を説いてくれた宣教師をだますことは、神様を欺くことである」と自らを戒め、与えられた責務に忠実になるよう努力してまいりました。

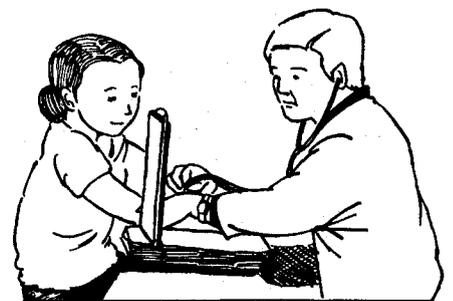
その後しばらくして、監督から神殿で家族の結び固めの儀式を受けるようにチャレンジを受け、その機会に恵まれました。日ごろ従順とは言いがたい息子たちの、純白な神殿衣を身に着けた姿を見た瞬間、胸に込み上げてきた熱い思いは忘れることができません。

やがて医院も軌道に乗り、地域の中に溶け込んで仕事をするようになりました。開業から13年が経過し、多くのかたがたが天に召される場にも立ち合いました。不幸にしてみずから命を断った人、看取られることなく亡くなったひとり暮らしの方、仕事や育ち盛りの子供を残して足早に去った人、治療のため紹介先の病院に私が足を運ぶたびに、現世での時間が砂時計のようにわかるのか、私の手を握って離そうとしなかった人、往診先の患者さんが苦痛のためか、「先生無情だよ、いつまでも生かしておかないで早く楽にしてくださいよ」と自らの死を懇願した人、病院に紹介しようとしても「いや最期まで診てくださいよ」とかたくなに入院を拒否し、私にこの世の時をゆだねた方。一人一人の思いが胸に去来いたします。そのような現実の中で、現世の世界との別れは永遠に続く神様の子供としてのひとつのセレモニーであると説きたいと心に思っておりました。数少ない機会ではありますが、ある時、世の時が終わった人の傍らにたたずむご家族の前に、「私は命が永遠に続くことを信じています。お祈りさ

せていただけますか」と尋ねました。ご家族の了解を得て祈った時、その患者さんとは来世でまた会えるという確信を得ました。

この仕事に携わっていて残念なのは、この世の時間には制限があり、すべてのかたがたに全力を尽くすには限界があるということです。

限られた時間を考えると、当然時間の管理が問題になります。最近、所属県医師会より役員^{へきり}の推挙をいただきました。まるで青天の霹靂^{へきり}でしたが、ただでさえ時間に追われている生活を振り返ると「とてもできません」と言ってお断りしたいと思いました。かつて子供が小さかったころには、スキーや遊園地などに連れて行くと約束し、「さあこれから出かけるぞ」と言った矢先、患者さんの容態の急変で中止したことは何度もあり、子供たちからの信用を失うことはたびたびでした。医師として働くだけでも時間の不足を感じているのに、役員になれば、月十数回にもわたる研究会、会議、打ち合わせなどの日程をこなさなければなりません。しかし、祈りによる答えはこうでした。「あなたにとって試練と賜は時間の管理のうちにある。」時間に追われる日々であっても、時間を管理し、及ばずながら奉仕の業に自らを捧げたいと願っております。(すずき・けんいち 第一副監督)





娘の改宗をきっかけに

——「若い心の会」を通じて強められる連帯感——

高崎ステーク部桐生ワード部

中里 ウメ

一 女の記代の改宗をきっかけに、
一 私は教会を知りました。娘は高校を卒業した1972年の夏、アメリカに行き、お世話になった教会員の家族を通して教会を知りました。1カ月して帰国すると、そのまま末日聖徒イエス・キリスト教会に通い始め、間もなくバプテスマを受けました。でも私はいつも日曜日ごとに楽しそうに教会に行く娘を見ていて、もっと家のことを手伝ってもらいたいのと思って、とても嫌な気持ちでした。

それがクリスマスパーティーや家庭の夕べの集会に誘われて行った時、いつも楽しそうにして行く娘の気持ちがよくわかりました。教会員の皆さんの雰囲気がとても温かく、私も楽しく時間を過ごすことができました。それでもまだ教会員になる気にはなれず、そうこうしているうちに娘は学業と就職のために上京してしまいました。

1年ほどして娘は急に桐生に帰って来て、また熱心に教会に通い始めました。娘の話によると、帰って来たのは東京で祝福師の祝福を受け、その中に家族に伝道するようにとあったので、帰って来たと言うのです。ある晩、翌日が旅行だというのに腰痛がひどく、気分もすぐれないので、行くのはよそうとあきらめていたら、娘が「お母さん、一緒にお祈りしてみようよ」と言って熱心に祈ってくれたのです。するとどうでしょう。朝起きてみると前の晩の痛みは少しも残っておらず、気分も良くなっており、無事に旅行に出かけることができました。「娘の通っている教会には何かがある」と思い、それまでも何度か宣教師のレッスンを受けたことがありますが、それからは真剣に勉強し、1974年8月24日にバプテスマを受けました。

それからは、2歳になる長女の子供

を自転車の前に座席を付けて乗せ、三女と3人で教会に通うようになりました。ところがその後私が転職した病院は、日曜日が休みではありませんでした。それでも私は聖餐会だけは出席しようと心に決め、朝1時間早く出勤し、2時間の昼休みをもらい、往復1時間の距離を、7年間教会に通い通しました。安息日に仕事をする事で心を痛め、仕事に行くたびに「どうか定年までお許しください」と苦しい祈りを捧げたものでした。

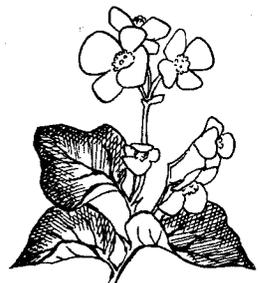
ある時、大工をしていた夫が急に仕事をやめることになり、途方にくれてしまいました。断食をして、1日も早く夫の仕事が見つかり、什分の一を笑って納められるような賃金がもらえるようにと祈りましたら、その日のうちに病院に来た人から話があり、とても良い条件で仕事先を見つけることができました。私のような者の願いをも天のお父様は聞いてくださることに感謝で涙があふれ、胸がいっぱいになりました。その5カ月後、夫は胃癌と診断され、手術をしなければ3年の命と宣告を受けました。手術を受けるに当たり、三女の夫が神権者だったので、灌油の儀式をもらい、穏やかな気持ちで手術に臨むことができ、その後きょうまで11年間元気に過ごしております。当時病院に勤めていたということもありますが、特別室の入院費用や手術費用は1円もかからず、私も看病しながら、働いて生活費を得ることができました。什分の一を納めているとこんなにも祝福をいただけるものかと、ただ感謝の涙を流す日々でした。

バプテスマを受けては19年、49歳だった私も68歳になろうとしています。その間たくさんの人々に支えられ、道をそれることもなく信仰生活を続けられました。改宗に導いてくれた娘は再

びアメリカに渡り、ソルトレークで神殿結婚をして4人の子供をもうけ、現在は同じ高崎ステーク部内で監督の妻としてモルモンの家庭を築いています。長女は教会員ではありませんが、自転車に乗せて教会に連れて行った長女の子供たちは、3人とも教会員として立派に成長し、それぞれ責任をいただいて頑張っています。夫も教会員ではありませんが、いつも私の責任を陰ながら助けてくれています。

また私にとって長年心のよりどころとなっているものに、YAH(「若い心の会」)があります。何年も前に同じワード部の兄弟が発案したもので、50歳以上の教会員が、第2と第4木曜日の夜、食事会と勉強会を開いています。桐生ワード部で始まったこの組織も、数年後にはステーク部全体に広がり、年に2回旅行をしたり、親睦会を開いたりしています。2年前の夏には、北海道を16日間かけて一周し、良い思い出になりました。この会を通じて同年齢の教会員の横のつながりが強められているのは言うまでもありませんが、会長や副会長の兄弟たちの働きがなければここまで続けてはこれなかったと思います。感謝に堪えません。

現在は近所に長女の家族が住んでいますが、夫とふたりきりの生活を送り、定年後の今も仕事をいただき、健康で働いています。天のお父様のあふれるばかりの恵みに感謝しています。(なかざと・うめ 初等協会教師)





桐生ではぐくまれた信仰

——愛と模範に支えられて——

高崎ステーキ部桐生ワード部
安田 政子

群 馬島の東端に位置する桐生の町に、1972年1月伝道が開始されました。翌1973年9月、当時高校生だった私は、いとこの家に宣教師が訪問したことがきっかけで教会へ足を運ぶようになり、福音を学び始めて間もなくバプテスマを受けました。早いもので、教会員としての生活も20年になるうとしています。

どの地の教会にも開拓時代があるように、桐生の教会も当初は古い民家を借り、座布団に座って礼拝行事を行ない、何を行なうのも宣教師と一緒にという具合でした。けれども集う人々には、それまで私が知っていた人にはない温かさがありました。信仰の道を歩むというよりも、「私もこのような人になれたらいいな」という単純な気持ちで、教会員としての生活をスタートしました。

それからというもの、私の生活のすべてが教会中心で、家族から「家庭を大切にする教会と言っていたのに、迷惑ばかりかけている」と反対こそされませんでした。教会に対するイメージはあまり良いものではありませんでした。無理もないことです。若い女の子が毎日、教会、教会と言ってほとんど家にいないのです。地方部宣教師に召された時など、当時保育園に勤めていた私は、仕事が終了するとその足で教会へ駆けつけ、自転車で桐生じゅうを走り回り、帰宅は11時過ぎになることも珍しくなかったのです。

その後、夫との出会い、結婚、3人の子供の出産、子育て、再就職と、それなりに信仰を試される出来事を経験してきましたが、弱点多い私はだんだん世の中に流され、形だけの信仰しか持ち合わせていない自分を嫌というほど知りました。いつしか天のお父様の良き娘、良き妻、良き母親になりた

いという思いを忘れ、現実には次々と生じる問題を切り抜けていくのに精一杯で、心の中に不平、不満が蓄積し、祈りや福音の教えもむなしく感じることもさえありました。

福音を実際に生活に取り入れるむずかしさを感じ、証を失いながらも教会を離れることができなかったのは、私の周りにはいる桐生の教会員一人一人を通して温く見守り続けてくださった神様のおかげです。本当の娘同様に心配し、気遣ってくださる兄弟姉妹。姉のようにいろいろと励まし、手を差し伸

べてくださる姉妹。年下なのにできの悪い姉を助けてくれる姉妹。社会的地位をひけらかすことなく謙遜な態度を示してくださる家族。何事にも感謝し、生活できる姉妹、兄弟たち。そして底ぬけに明るい若い兄弟姉妹。桐生の教会員たちから受けるこの多大な愛や模範により、私のささやかな信仰はまさしく支えられていたのです。途中、2年ほど桐生を離れて別のワード部へ集っていた時も、桐生は私の誇りでした。

現在、フルタイムの仕事を持つ末日聖徒の女性として、家庭と仕事を両立させ、思春期を迎えつつある子供たちのさまざまな問題や試練にも出会う忙しい日々は当分の間続くでしょうが、常に神様の導きを求め、この愛する桐生の地で、ともに同じ道を歩む教会員一人一人と力を合わせて、ささやかな信仰をこれからもはぐくんでいきたいと願っています。(やすだ・まさこワード部扶助協会教育担当副会長)

受け継がれ、広がっていく主のみ業

——こたえられた祈り——

高崎ステーキ部桐生ワード部 大木 節子

伝 道に出て1年ほどたった1992年の夏、岡山伝道部で働いていた私の手元に1通の手紙が届きました。それは20年前に私の家族に福音を伝えてくれた宣教師からでした。手紙の中には、その宣教師が私の家を見つけた時の様子を書いてありました。

そのころ彼には求道者がなく、福音を受け入れる人を見つけたいと思っていました。そのために断食して祈り、自分にできることは何でも行なうと神様に約束しました。その日も伝道するためにアパートを出ましたが、行くあてもなく自転車をこぎ始め、ただ聖霊が導いてくれるようにずっと心の中で祈っていました。それまで行ったことのない所まで行き、道がわからなくなるので帰ろうと思ひ信号を左に曲がろうとしたら、「右へ曲がりなさい」というみたまのささやきが聞こえました。彼はそのささやきに従って右へ曲がり、

すぐに戸別訪問を始めました。2軒目が私の家でした。こうして両親はそれから7カ月間、彼らから福音を学び、バプテスマを受けました。

私はその手紙を読んだ時、とても不思議な気持ちになりました。自分もその時宣教師として同じように働いていたからです。彼がどのように福音を伝えてくれたのかを知って、私の伝道への思いが少し変わりました。福音の種がまかれ、それが何十年もかかって育ち、



伝道中の大木節子姉妹(左)

そこからまた新しい種がまかれています。私は今その種を持って働いているのだと知りました。主のみ業は受け継がれ、広がっていくものだとわかり、そのすばらしさを知りました。その主のみ業の中に自分をゆだねている幸せを伝道中、存分に味わうことができました。

伝道も後半に入った時に、ひとりの女子高校生に福音を伝える機会がありました。夏休みだった8月には、毎日のように彼女と福音を分かち合い、すばらしい時をともにすることができました。しかし学校が始まると、彼女の心が少しずつ主から離れていくのを感じました。そんな彼女に思いつくすべてのことを同僚とともに行ないました。でも状態はあまり変わりません。同僚と話し合い、私たちができる最後のことは祈ることでした。そこで、彼女と時間を決めて、毎晩特別に祈ることにしました。

数日後、彼女に電話で「これから祈ろう」と伝えると、「ひとりで祈るのは寂しいから一緒にこのまま祈ってほ

しい」と言われました。私は受話器を持ち、祈り始めました。祈りを捧げるにつれて、心がどんどん温かくなってきました。同僚の泣く声が聞こえてきます。私の心の中には、彼女がまっ白なドレスを着て笑っている姿が浮かんできました。とても強くみたまを感じ、祈り終わった後に「私は今とても良い思いがあるけど、あなたはどうか感じますか」と聞くと、彼女の答えは、「別に」というものでした。「私たちは確かにみたまを感じた。なのに、どうして彼女は何も感じないのだろうか。あれは私たちの思い込みなのだろうか。」その後私はすぐに転任になりました。

1992年12月に伝道を終え、家に帰ってきた時に、彼女から手紙が届き、クリスマスイブにバプテスマを受けるとありました。

その時、神様が確かに私の祈りを聞いて、こたえてくださっていたとわかりました。今も彼女は元気に教会へ通い、セミナーで学んでいます。「私も

いつか伝道に出たい」と言った彼女の言葉を、とてもうれしく思っています。「現在、私はステーキ部宣教師の召しを受けています。父は、伝道主任として働いています。以前は伝道に無関心であった家族が、こうして親子で主のみ業に就く機会に恵まれました。天のお父様はさまざまな方法で私たちを導き、祝福してくださっています。

伝道中に学んだたくさんの方のことをこれからの生活に生かしていきたいと思っています。その中のひとつに、当時の宇田川精一郎伝道部長ご夫妻がいつも話してくださった言葉があります。「大切なのはどれだけ与えたかということではなく、与える行為にどれだけ愛を注いだかということです。」

私の家族に福音を伝えてくださった宣教師に心から感謝しています。その福音の種を大切に、今度はそれを家族とともに心を込めて、愛する人々と分かち合っていきたいと思います。(おおき・せつこ ステーキ部宣教師)

我が家の家庭の夕べ

「家庭の夕べ」を500回

町田ステーキ部町田第1ワード部 石王 恵子

我が家で最初に「家庭の夕べ」を行なったのは、結婚してすぐの1979年10月22日でした。その日から続いている家庭の夕べは、途中お休みをした時もありましたが、もうすぐ500

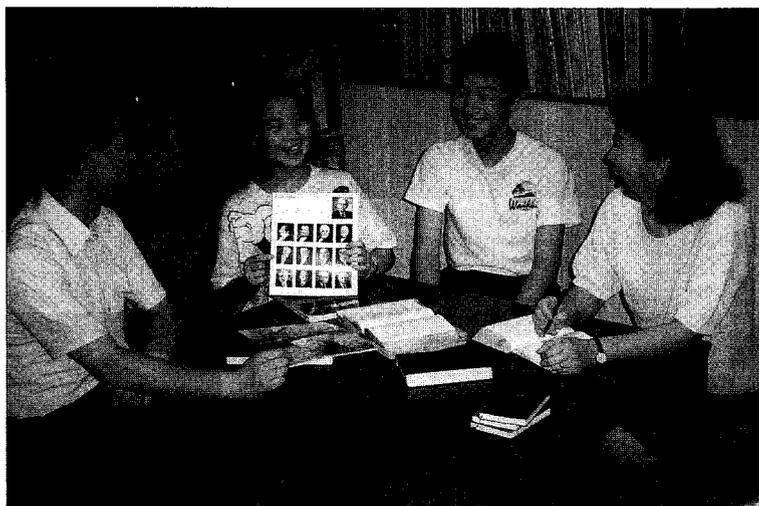
回目を迎えます。

この家庭の夕べのプログラムは、私がこの教会の教えに添った生活をしようと思ったきっかけのひとつでした。初めて教会に行った時、集っているか

たがた、特にご家族がとても仲良く、お互いを大切にしていると強く感じました。どうしてこんなに温かい感じがするのかと、いろいろお話を聞いて学んでいくうちに、家族が福音に添った生活をしていること、また「家庭の夕べ」というプログラムがあり、週に1度、家族が集まって話し合ったり、勉強やゲームをしたりして、一致を図るように努力していることを知りました。さらに、お互いへの愛や尊敬を日々の行ないの中ではぐくむことや、家庭を天国の一部にできるという教えを心からすばらしいと思いました。

私自身は厳しいけれども愛情豊かな両親のもとで不自由なく育ち、不満が特にあったわけではありません。が、教会員のご家族の模範を目にするにつけ、自分もこのような家庭を築きたいと考えるようになりました。

こういうわけで、結婚した私たちは、我が家の伝統を築くべく、張り切って家庭の夕べを始めました。たったふたりの家庭の夕べは、自分たちに必要なことがすぐにできました。聖典の勉強、アルバムの整理、北海道に住む夫の両



家庭の夕べをする石王ご家族

親への近況報告、スライドの上映会、レコード鑑賞、また時にはお客さんを招いての食事会など、計画を立ててかなり納得のいくものができたように思います。そして、その都度ノートに記録を付け、その記録もだんだんと増えていきました。

ところが、最近になってその記録を読み返してみると、長男の聖太が生まれてから3年間の記録がありません。この空白の3年間は どうして いたのだろうか？ 家庭の夕べをしていなかったなんて信じられない、とふと考えました。自分では子育ては、それほど大変だったという思いはなかったのですが、家庭の夕べを行なえないほど心にゆとりがなかったのだと、改めて当時を振り返りました。慣れない子育てに加え、我が家の子供と同年代のふたりのおいを日中預かることになり、夢中で過ごす毎日でした。

この最中、家族に、特に子供にとって、やはり家庭の夕べは大切だと感じ、3歳を迎えた聖太と1歳5カ月になった長女のまどかとともに家庭の夕べを再び始めました。子供が飽きずに、何よりも家族が一緒に行なうことの楽しさを感じられるようにプログラムを考えました。開会の賛美歌、お祈り、聖典の勉強(特に子供向けの絵本や紙芝居を使用)、ゲーム、リフレッシュメント、閉会の賛美歌、お祈りというパターンができあがりました。ゲームでは一緒に切り紙細工を作ったりパズルをしたり、開閉会の賛美歌も初等協会の歌を歌ったりと工夫をし、お祈りや指揮者の責任は子供たちにも与えました。子供たちは責任を果たしたときに一人前になった気分になり、家族の一員であるという連帯感が芽生えているようでした。ある日の感想には、「聖太君が中心の家庭の夕べで楽しかったです。よくお祈りができます」と書いてあります。

子供たちも大きくなって、小学校6年生、中学校1年生になりましたが、今でも「きょうは家庭の夕べだよ」と言うとも早めに宿題を終らせて準備します。内容も少しずつ変わってきて、私たちのレッスンに代わり、子供たちが初等協会や神権会、日曜学校で学ん

できたことを教えてくれるようになりました。子供たちが先生にお願いして、その日のレッスンで使用した標語カードや視覚資料を借りてきて、私たち家族にレッスンしてくれるのです。教材を熱心に準備して下さる教師のおかげで、家族皆がその恩恵を受けています。教材を使用しなかった場合は、子供がノートに要点を書いてきて教えてくれます。また、お客様をお招きしたときなどは子供たちも少し緊張し、大人っぽく振る舞います。

家庭の夕べを行なうことによって私

たち家族は一致すること、そして何でも話し合える楽しい雰囲気を家庭にもたすことができました。

子供たちがもっと成長すると、家族が同じ時間に一緒にそろえることがむずかしくなってくるでしょう。それでも週に一度の「家庭の夕べ」の伝統は守り続けていきたいと思っています。そして大人になって、それぞれに家庭を持ち、自分たちの家庭の夕べの伝統をさらに築いていってほしいと願っています。(いしおう・けいこ ステーク部初等協会会長)



「何も悪いことはしていないのに」

——イエス・キリストの贖いに感謝——

町田ステーク部町田第2ワード部 上田 智恵子

残 暑の厳しい昨年の9月に、流産という経験をしました。私には支えとなる福音があると自らを慰め、何があっても受け入れるつもりでいましたが、医師から「おなかの中の赤ちゃんはどうやら死んでしまっているようだ」と言われた時には思わず涙が流れ、「一体福音を知らない人はどうやってこのような悲しみを乗り越えていくのだろう」と思わずにはいらませんでした。その後、ばたばたと手術の日程が組まれていきました。15分ほどの簡単な手術だとわかっていましたが、全身麻酔をかけられたことのない私は、初めての経験に必要以上に恐怖を感じていたようです。

手術の前日、私はあまりの怖さに、夫にこう訴えました。「どうして私、何も悪いことをしていないのに、こんな痛いことや怖いことばかりなの？」すると夫は、私の方をじっと見ながら答えました。「そうだね、何も悪いことをしていないのにね。でもイエス様も同じだったんだよ。」

私はそのひと言に非常に謙遜な気持ちにさせられました。私はイエス様以上に良い人でしょうか。イエス様と同じくらい恐ろしい目に遭うのでしょうか。

か。答えはすべて否です。しかも最も重要なのは、私は自分の健康を取り戻すためにだけ、ほんの少し恐ろしい思いを味わうだけですが、イエス様は全人類のために、人間の想像を絶する恐怖と苦しみに向き合われたということです。

心がたちまち悲しみと喜びが混ざったような思いであふれ、あがなすばらしさに深い感謝の念を抱きました。

またこの経験を通して、私は、すべての人にはイエス・キリストの愛があるのだとわかりました。多くの方がお電話をくださり、生まれなかった私たちの子供のために泣いてくださる方までいらっしやいました。2週間動けずにいた私の代わりに、食事を準備して下さったたくさんの姉妹たち、それほど親しくなかったのに毎晩祈って下さったご家族、忙しい仕事の合間を縫って家事に育児にと精を出してくれた主人。奉仕をしていただく側に立って初めて気づいた、人々の愛と助けでした。確かに人には欠点があるのかもしれないですが、同時に、聖典にもあるとおり天父の息子、娘としての属性を備えているのも確かなことなのです。

「あなたは、身ごもった女の胎の中

で、どうして霊が骨にはいるかを知らない。そのようにあなたは、すべての事をなされる神のわざを知らない。」
(伝道11：5)私も神様のなされるすべてのみ業やその理由を知っているわけ

ではありませんが、与えられるすべてのことに感謝しております。すべてのつらい経験は苦しみの山を越えたとき、イエスがキリストであることを証してあります。そして私もまた、イエスがキ

リストであり、生きておられることを、心より証したいと思えます。(うえだ・ちえこ 扶助協会教師)

JMTC

ローカル

7月に召された専任宣教師

第168期生16人



後列左から1-6, 中列左から7-11, 前列左から12-16

〈名前〉

1. 高橋 満
2. 山中 隆史
3. 笹野 幹雄
4. 福井 祥文
5. 竹村 富士徳
6. 渡辺 謙一
7. 堀田 江利子
8. 後藤 美代子
9. 宮村 芳江
10. 青柳 真子
11. 吉永 美香子
12. 比嘉 美智子
13. 竹原 正子
14. 金山 陽子
15. 村上 早苗
16. 杉山 志保

〈出身地〉

- 岡山 S / 松江 W
 仙台 M / 青森 D / 八戸 奏 B
 東京西 S / 八王子 第1 W
 神戸 M / 福知山 D / 西脇 B
 東京西 S / 多摩 W
 東京北 M / 新潟 D / 新潟 B
 名古屋西 S / 御器所 W
 大阪東 S / 高槻 第1 W
 岡山 M / 山口 D / 下関 B
 東京東 S / 千葉 W
 福岡 S / 北九州 W
 沖縄那覇 S / 首里 W
 名古屋 M / 石川 D / 金沢 B
 名古屋 M / 富山 D / 富山 B
 仙台 M / 郡山 D / 郡山 B
 札幌 S / 札幌東 W

〈伝道地〉

- 札幌 伝道部
 岡山 伝道部
 仙台 伝道部
 仙台 伝道部
 神戸 伝道部
 岡山 伝道部
 東京南 伝道部
 沖縄 伝道部
 名古屋 伝道部
 神戸 伝道部
 神戸 伝道部
 福岡 伝道部
 岡山 伝道部
 東京北 伝道部
 岡山 伝道部
 岡山 伝道部

M: 伝道部, S: ステーキ部, D: 地方部, W: ワード部, B: 支部

お知らせ

役員の変動

1993年6月8日から1993年6月28日までに管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の変動(敬称略)

- 名古屋伝道部石川地方部金沢支部
新支部長: 西村勇三
(前任者: 福元隆司)

新ユニット

- 東京北伝道部宇都宮地方部古河支部
支部長: 麦屋幸俊

名称変更

- 大阪堺ステーキ部和歌山ワード部
監督: 藪谷 彰

(1993年2月号ローカルページ, p. 7で和歌山支部とお知らせしましたが, ワード部の間違いでした)

- 神戸伝道部福知山地方部舞鶴支部
支部長: 甲斐英樹

(1993年6月20日, 福知山支部より名称変更)

皆さんの原稿を募集しています

ご投稿の際には連絡先(住所, 電話番号), 教会での責任(役職名), 所属ユニット名と併せて生年を記入し, 写真と同封のうえお送りください。原稿は一部手直しさせていただいたり, 掲載までに時間がかかる場合もありますので, ご了承ください。

あて先: ☎150東京都渋谷区桜丘町28-8 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室

電話03(5489)9251

ファクシミリ03(5489)9254



「野菜畑で」 リュータ・シヨタニーナ(7歳) ロシア, サンクトペテルブルグ

ソルトレークシテイナーにある教会歴史美術館は、第1回国際児童絵画展を開催した。

写真は同絵画展で展示された300点の作品のひとつ。(本誌「世界の子供たちの芸術」p. 34参照)

パラグアイの教会は、
開拓者たちの築いた
堅固な基礎の上に
立てられている。
これらの開拓者たちの中には、
何十年も前から
教会員の人もいれば、
数日前にバプテスマを
受けたばかりの会員もいる。
(本誌「パラグアイの開拓者たち」
pp. 10-21参照)



パラグアイ

